

日本武道学会剣道専門分科会会報 [2011年度]

ESPRIT

剣道専門分科会会長挨拶

剣道専門分科会のこれからの役割

平成23年度 日本武道学会第44回大会 剣道専門分科会企画フォーラム

剣道の固有性を考える

海外における剣道学習者が、剣道に求めるもの

平成23年度 剣道専門分科会研究会

日本学としての武道

会計報告

事務局だより

Vol. 10





会長挨拶

剣道専門分科会のこれからの役割

巽 申直 (茨城大学)

昨年の、東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所の事故により被災された地域の会員の皆様には、心からお見舞いを申し上げますとともに、教育研究活動の再開に向けて着実な一歩を踏み出されることを心から祈念致します。

日本武道学会が創立45周年を迎えるに当たり、先の武道学会理事会で第45・46回大会を学会創立45周年記念事業と位置づけることが承認されました。振り返ると、15年前の30回記念大会で、自然科学系、人文社会系の発表分野に加えて武道教育法（現武道指導法）の分野が新規に設置されたことは、医学系で言えば臨床の分野が極めて重要であると同様に、武道においても、基礎的・学術的な研究のみならず、実践研究分野の必要性を改めて確認した決定であったものと思われまます。その時点では、中学校における武道の必修化の話題は皆無であっただけに、この分野の設置は時代を先取りしたものであり、大変意義のあるものだったと言えるでしょう。

いよいよ、本年度から中学校体育科において武道・ダンスの種目

も他の運動領域と同様に必ず履修することが制度化され、その第一歩を踏み出そうとしています。学会及び専門分科会におけるこれまでの指導法研究の成果が、現場で広く活用されることを期待するとともに、現場の課題に対してさらなる学術的な対応ができるよう貢献する必要があります。とりわけ必修化における喫緊の課題は、事故や傷害を生じさせない安全指導の対策や、限られた時数の中で生徒に剣道の特性を十分に味わわせることのできる教材研究、剣道の伝統文化の継承に関する具体的な対応等について、専門分科会としてどのように応え、成果を出せるかが問われることと思われまます。今後、社会から武道に対する期待はより大きくなることが予想されるだけに、一層の研究成果が求められます。

また、近年は国外における剣道文化に対する理解の相違についても課題が生じてきており、諸外国の研究者との研究推進や連携が極めて重要になっています。武道の国際化に関しては、武道学会の各専門分科会においても「『柔道

は、どこへ行くのか?』（英国柔道連盟シド・モア氏（第29回大会）」、「『大相撲における近代化と伝統の発明』（リー・トンプソン博士）（第31回大会）」、「『剣道の固有性を考える-海外における剣道学習者が、剣道に求めるもの-』（塩入宏行氏、本多壮太郎氏）（第44回大会）」の講演会やシンポジウム等がこれまでも幾度となく企画され議論されてきました。しかしながら、必ずしも十分な相互理解が得られていない状況にあり、この状況（傾向）はますます助長されると懸念されまます。この解消には、学術的な解決が重要かつ不可欠ではないでしょうか。剣道専門分科会は、その責務を十分に果たすことが肝要かと考えまます。

最後になりましたが、会員の皆様方のご健勝と御活躍を心からご祈念申し上げます。



日本武道学会第44回大会 剣道専門分科会企画フォーラム

日時：平成23年9月1日（木） 14：00～16：00

場所：国際武道大学（D会場 9305）

テーマ：剣道の固有性を考える

—海外における剣道学習者が、剣道に求めるもの（長期滞在指導の経験を通して）—

パネリスト：塩入 宏行（埼玉大学名誉教授）、本多 壮太郎（福岡教育大学准教授）

司会：田中 守（国際武道大学教授）、太田 順康（大阪教育大学教授）

※本稿は、武道学研究第44巻3号にすでに掲載されておりますが、剣道分科会のみご所属の会員もおられますので、武道学研究編集委員長の了承のもと、本誌においても掲載させていただきます。

あいさつ

巽 申直（茨城大学教授）

昨年8月に文部科学省からスポーツ立国戦略が発表されたことは皆さんご存知かと思えます。我が国のこれからのスポーツの在り方が提示されています。これによって6月にはスポーツ基本法というものが制定されました。我が国のスポーツ振興はこの法律に基づき推進されていくと考えられます。注目すべき点の一つに、スポーツを人類が共同して発展させてきた世界共通の文化の一つである、と定めたことをごさいます。新たなスポーツ文化の確立をめざすものであろうかと思えます。この文化の確立にはスポーツをする人だけでなく、見る人、支える（育てる）人を重視する施策や体制整備を推進し、スポーツの持つ多様な意義や価値が社会全体に広く共有させることを強調しています。

スポーツの国際交流は、言語や生活習慣の違いをこえ、同一ルールの下で互いに競い合うことなどにより、世界の人々との相互の理解を促進し、国際的な友好と親善に資することが期待されています。しかしながら我が国固有の文化である剣道がこの流れのなかで、本質から大きく変容していく可能性が無きにしもあ

らず、このことに危惧している人がいると思えます。剣道専門分科会では、ここ数年、学会でのシンポジウムや定例の研究会におきまして、剣道の、武道の固有性について議論し、なにを大切にし、また、継承していかなければならないのかについて検討を重ねてきたと思えます。特に、近年の諸外国の動向のなかにはいささか気になることがあり、知らないところで大きな変化をしめしていることもあります。それだけに私達の果たす役割としましては、学会での議論を、内外へ広く情報発信することがまずもって大切かと思えます。

本日は大変ご多忙のなかパネリストをご承諾いただきました塩入先生と本多先生にたいへん感謝いたしております。長年にわたって海外普及に貢献されて来られました両先生から外国における剣道の受け止め方等に生のご意見を聞かせていただけることに大変貴重なことであり、楽しみにしております。どうか、ご参集の皆様のご積極的なご意見をいただくことを希望し、挨拶とさせていただきます。

田中 それではさっそく、今年度剣道専門分科会企画フォーラムを開催します。今回は「剣道の固有性を考

える—海外における剣道学習者が、剣道に求めるもの（長期滞在指導の経験を通して）—」というテーマでの講演を企画いたしました。中学校において、平成24年度から、武道の必修化が完全実施されることとなります。では、「我が国固有の伝統と文化により一層触れさせることができるよう指導の在り方を改善する」にあたって、我々ほどの様に考え、どのような工夫をすべきなのでしょう。昨日の本部企画フォーラムにおいても、固有性あるいは普遍性についての議論がございました。固有性というのは日本人が大切にすべきもの。人々に誇れるものともいえるでしょうが、その結果、外国人を排除するものになったり、一方的に押し付けることになってしまうのは慎むべきところでもあります。また、伝統性や文化性については、とかく「礼」の指導のみをもってやり過ぎればちですが、決してそれで良い



はずはありません。そのあたりを踏まえ、あらためて剣道の固有性や普遍性について考えていきたいと思いをします。

本日、塩入先生、本多先生をお迎えし、豊富な海外経験の中で感じ取られた剣道指導上の諸問題についてお話をうかがい、今後の貴重な指導材料にさせて頂きたいと思いをします。

太田 お二人のプロフィールはそれぞれご覧いただければと思いをしますが、本多先生の経歴ですが、ご存じのように英国に長く滞在されております。1995年に福岡教育大学を卒業、97年に同大学院を修了後、グロースターシャー大学に入学し、2003年に同大学の博士課程を修了しています。同大学で長年剣道の指導にあたられました。その後、2007年に福岡教育大学に戻ってこれら指導されております。どうぞ宜しくお願いいたします。

本多 ただいまご紹介いただきました福岡教育大学の本多でございます。どうぞ宜しくお願いいたします。私はもともと、福岡教育大学の大学院を修了後、体育方法学の研究をするためにイギリスに留学しました。もちろん剣道は大学クラブの一部員として続けていました。博士課程で学ぶ過程でいろいろな悩みが

あったのですが、剣道がいつも私を支えてくれました。今の大学では、運動学と体育科教育を担当しているのですが、少しでも恩返しができればと思つて、剣道の国際普及・発展に関する研究も続けております。

先ほど、田中先生が少しおっしゃりましたけれど、研究をすればするほど自分はなにもわかっていない。何も恩返しできていない。イギリスでも指導に携わり、大会などではそれなりに実績を残したのですが、いざアカデミックに研究をして、いろいろなことが明らかになるにつれて自分はわかっていなかったということがわかりました。けども、わからなかったことがわかっただけでも大きな発見であつて、だからこそもっとわかりたい。そのように動機づけられて研究を続けております。

本日は剣道の固有性を考えるということなのですが、私なりの体験や、研究成果を報告させていただいて、先生方とともに考えていただければと思いをします。よろしく願いいたします。

私の英国での剣道および剣道学習者との関わりですが、初めは大学クラブの一部員でありつつも、奉仕的な立場で、大学クラブで稽古しながら指導のお手伝いもしてまいりました。英国は2003年の第12回剣道世界大会ホスト国だったこともあり、前年の2002年からナショナルチーム強化ということでコーチに任命されました。この時期は博士論文の締め切りや子供の誕生など人生の中で、一番忙しい時期で、また充実していた時期でした。世界大会終了後は、ナショナルチームだけでなく、イギリス全体のテクニカルディレクターの

ような立場での指導とシステム作りの協力を依頼され、ナショナルコーチとなりました。ちょうどそのころ、研究も一区切りついていたのでお引き受けしました。同時にお世話になった大学や地域に貢献をしたいと思ひ、中等教育機関で、剣道クラブや体育授業での剣道のボランティア指導者としてとしてお手伝いを始めました。

まずは、私のいたグロースターシャー大学での剣道授業ですが、2000年よりイギリス初となる大学カリキュラムとしての選択科目「イントロダクション・トゥ・剣道」という授業が始まりました。導入の背景は、当時グロースターシャー大学スポーツ科学部に所属し、生理学が専門であったイアン・パーカー・ドット先生の存在がありました。イギリスでの私の前の前のナショナルチームコーチであり、大学クラブの部長でした。それと、スポーツ科学部の学部長の先生が、ここがキーワードになるのですが、「なにか新しいこと。これまでになかったスポーツをしたい」ということでお二人が話し合い、イギリスで初めて剣道が授業として導入されることになりました。私は2002年から関わるようになりました。2000年の間の準備期間にもお手伝いしましたが、1年間、データ集めのため日本に帰っていたので、講師となったのは2002年からです。

3、4年間の実施の間、受講生にアンケート調査を行いました。選択科目は80くらいあったのですが、剣道の選択理由は「やったことがない」「見たことがない」「何か新しいことがやりたい」、もしくは柔術や空手などの「他の武道の経験あ



り」でした。大学の授業としての剣道は、スペインのバレンシア大学でも集中講義として毎年行われています。私も2006年に訪問し、いろいろと調査をさせていただきました。以前は空手の集中講義が行われていたそうです。空手が何らかの理由で開講できなくなり、バレンシア大学の剣道部の指導者が代わりに剣道を担当するようになりました。

授業はまったく経験のない大学生が参加するのですが、この集中講義は指導者の意向でとても厳しい。体験だけでは不可、単位は認定されません。シラバスにも明記されており、4日間みっちり鍛えられます。筆記テスト、スキルテスト、さらに8割以上の参加が義務付けられました。それ故に、受講生へのアンケートでは、「何か新しいことをやってみたい」とかではなく、基本を学ぶことが受講の大きな理由になっていました。

イギリスの中等教育機関においての剣道なのですが、これは2003年1月にセカンダリースクールで始まりました。先ほど紹介したイアン・パーカー・ドット先生は大学を退職後、今度は生理学ではなく、剣道で何らかのかたちで地域に貢献したいという気持ちをもっていました。ドット先生の昔の教え子が、同じ州内の中等教育機関で体育教員になっており、そこから話がまとまり、剣道が指導されるようになりました。これが一つセットアップされると2年間で、グロスターシャー地域に3、4のクラブができました。その一つキングスキルという中等教育機関、ここは体育・スポーツコースがある学校で、授業として剣道を取り入れたいということになり

ました。クラブも発足したのですが、「何か新しいもの」「何か異なるもの」を提供したいというのがやはり大きな理由でした。イギリスだからといってすべてがラグビーやサッカーが好きなのではない。球技が嫌い、苦手な生徒もいるわけです。彼らに対し自信が持てるものを提供したいという考えのもと、剣道の授業がスタートしました。

次に学校をとびこえて、イギリス全土のジュニアの人口の推移をみたいと思います。

1996年から2005年までの数字しかありませんが、2000年以来、ジュニア及び女子の会員数が増加しています。全体としては2004年に英国剣道協会が目標としていた1000人を突破致しました。これは世界大会の後ですね。これが大きな要因だったのは確かです。2000年以来、ジュニアの総数は100を再び超え、以来増加傾向にあります。2005年には協会総数に占めるジュニアは20パーセントを超えました。この要因を当時の英国剣道協会の部長に分析してもらったのですが、『ラストサムライ』『キルビル』などの映画の影響、クラブや協会のHPなどを立ち上げたりして情報が得やすくなった。あとはイギリス剣道協会が初心者でもできるような6週間～8週間からの初心者教室を開講したことにあるということでした。私も携わったのですが、2004年からイギリスではジュニアセミナーというものを、開講しました。大会においても、2005年以前はジュニアの部の年齢カテゴリー数が少なく、例えば9歳と15歳が戦うこともありましたが、これも9歳～12歳、12歳～13歳、14歳～15歳など細かくカテゴリーを分けて試合を

するようにして参加者を増すよう改善されました。

2005年には、協会内の児童保護法を制定し、文字通り「子供をしっかり守って育てる」ということが剣道でも明文化されました。例えば、更衣室で子どもと二人きりになってはいけない、トイレに行きたいといっても保護者に付き添いをお願いする、といったことなどが明文化されました。私の例を紹介します。日本では、打ち込み稽古を終える時、小手でポンと胴をたたいて合図することがあります。あるクラブでこれをやったところ、終わったら「次からは絶対にやめてくれ」と言われました。保護者に誤解を与える危険性があるとのことでした。

今度は大学剣道クラブについてです。学生の意識、取り組みについて報告させていただきます。対象としたのはイギリス内の10の大学クラブです。男性部員71(48)、女性部員24(11)、計95(59)名とありますが、カッコの中は学生外部員です。イギリスの大学クラブは大学生のみで構成されているわけではあり



ません。社会人、セカンダリースクール生徒なども部員として登録しています。ここは日本と異なることです。たとえばケンブリッジ大の場合、私が調査した時、25人男性部員がいましたが、10人が学生外部員でした。

大学生部員だけに絞って「剣道クラブ入部理由」を複数回答で求めました。武術・武道にもともと興味があった方は40名。もともと興味があったわけではないが96名です。うまく説明できるように読ませただけですが、回答は武術・武道にもともと興味があつて入部した回答と、もともと武術・武道にとくに興味がなかったという、他の理由の回答に二分されます。なお、両方にまたがって得られた回答はありませんでした。

前者の回答をもっと詳しく分類していきますと、さらに二つに分類できました。一つは「以前、もしくは今も他の武術・武道の経験があり、武術・武道の精神性や競技性に興味があり、これまで経験のない剣道に入部した」というものです。ここでは全体の16.18%の22名から回答が得られました。もう一つは「過去に他の武術・武道の経験がなかったが、以前から興味があつた」という理由で、13.24%で、18名からの回答が得られました。後者の入部理由は5つに分けられます。5つの回答には複数にまたがっているものもありました。一つは「経験したことが無い、何か新しいものをしたかった」という理由で、全体の最多21.32%の回答が得られました。二番目に多かったのは「フィットネスの手段」であり、13.38%、これに続くのが「過去に武術・武道の経験があ

り、剣道に興味があつた」回答と同じく、三番目に多かったのは「クラブ紹介での演武を見て」という回答でした。

こういった結果から、これは「大学に入学して剣道を始めた学生部員80人の回答結果」なのですが、もともと興味があつたわけではなく、他の理由があつて偶然、あるいは手段的に入部している学生が半数でした。この結果は、入部してくるほとんどが経験者であり、有段者であり、目的的に入部してくる日本の大学クラブとかとはかなり違うイギリスの特徴です。先ほどの中等教育機関で剣道を選択した授業、クラブの生徒を対象とした先行研究も、「何か新しいものがしたい」「これまでと異なるものがしたい」という意見が多く得られましたが、ここでも共通するところです。

今度は「学生部員の継続要因」ですが、ここでも「技術的特性に惹かれて」、「精神的特性に惹かれて」、といった先行研究とほぼ同じような多く回答が得られました。また、「フィットネスの手段」、「新しいものにチャレンジできるから」という回答も多く得られています。目的的というより手段的にとらえる傾向はここでも大きいものでした。

さらに、80人の大学生部員に「クラブ指導者へのリクエスト」を聞いてみました。「個人的な指導、アドバイスの機会を増やして欲しい」という回答が65人いました。イギリスの大学のクラブだけでなく、海外のクラブは六段、七段の先生から初心者まで一堂に集まって稽古をする場合がほとんどと言えます。日本の中学、高校、大学のような年齢差が3年から4年、段位も一、二段しか違

いがないということではなく、年齢から技能から、段位、はたまた言語まで異なる方々が混ざって稽古をします。指導者は大変です。個人的な指導、アドバイスが欲しいというのは当然の結果かなと思います。それと関連して「指導者の数を増やして欲しい」と回答しています。これも「自分が個人的に指導を受けたい、全体的、グループ的ではなく、個人的に指導を受けたい」という考えの表れと言えます。稽古時間や回数を増やしてほしいというものもそういうものの表れではないかと思います。その機会がないなら、せめてもう少し理論的なものを、レベル別、能力別にしてほしいというものも、そういうものの表れかと思えます。

少しまとめますと、私が調査をしたイギリスの場合、剣道は新しいものです。仮により多くの開始者を求めることを考えると、技術的特性や精神的特性だけでなく、フィットネスや人との関わりなどの手段的要素も考えていくべきです。例えば、大学ではクラブ紹介があり、イギリスでもフレッシューズフェアがあります。ただ演武をするだけでなく、フィットネス的な要素も紹介していくべきです。これはあくまでも数を増やそうとした場合です。指導者は各部員を接する時間を持ち、技術を伝承する機会を多くもつことが大切です。これはどのクラブ、どのスポーツでも同じです。指導者はここに気付いているのですが、なかなか実行できないのが現実です。

現実的に、深層的に、包括的に調査を深めていきたいと思い、開始者というより継続者、修練者である大学生エリート剣士の継続要因を調べました。

まず、「なぜ彼らが剣道を継続して、真剣に取り組むようにいったか」ですが、その要因は、「稽古の成果がかたちとなって表れた」、「剣道を続けるうえでの目標が明確になった」、でした。これは特別新しい発見はないのですが、それぞれの理由の具体的なインタビュー結果が、お配りした資料にあるのでご覧ください。

今度はイギリスの人間関係についてです。「人間的に尊敬できる先輩や指導者がいたから」「ともに学び合える仲間がいたから」。そしてイギリスの中ですが「指導者・先輩ではなく、仲間として接する日本人留学生から刺激を受けた」という理由がありました。

これらのエリート剣士は、日本での剣道体験があります。長い人は数か月、短い人は数週間です。経験や観察体験なのですが、「高段者、指導者との稽古、観察体験を通して」、そして高段者、指導者だけでなく、「同年代・同段位との日本人修練者との稽古、観察体験を通して」という回答も得られました。

「日本での剣道人間関係を経て」というカテゴリを作ったのですが、これは先ほどの高段者であったり、指導者であったり、同年代の経験者であったりです。外国からわざわざ日本に来られているということ、食事に連れていってもらったり、飲み連れていってもらったりして、そこで親切にしてもらえただけでなく、真剣にいろんな話をしてくれる。通訳はもちろん入ったりするのですが、先生の方から言葉の壁を乗り越えてきてくれる。イギリス人は日本同様、島国のためシャイなところがあります。一度仲良くなる

ともものすごく仲良くなるのですけど、そこまで時間がかかります。そういういった彼らに踏み込んで入ってきてくれる。彼らは「僕は強くないから」とか「僕は経験が浅いから」と謙虚なのですが、一人の剣士として扱ってくれることが嬉しい、強烈に心に残ったことになりました。そういう経験が剣道を継続させようという気持ちだけでなく、「真剣にやるんだ」「今度会うまでにこうなる」という気持ち、継続要因になったようです。

同じエリート剣士に「剣道のあり方」についての考えも聞いてみました。まず「剣道の独自性」というカテゴリですけど、剣道というのはこうあるべきだという彼らの考えです。正しい、間違っているということではありません。

「自己形成的なものであるべきだ」「自分自身を人として成長させてくれるもの」具体的には、「剣道を通して意志力が高まる、集中力が高まる」、「剣道とはそれらを高めてくれるものなのだ」という考え方は、もう一つは、これはアレック・ベネット先生もおっしゃっている「自己発見的なものだ」という位置付けです。「稽古をするなかで自分が知らなかったことを気付かせてくれるものだ」ということです。「いろんな自分に気付かせてくれる。剣道はそうあるべきなのだ」という考えです。他には、剣道は日本の伝統文化で、刀を観念的に取扱い、武士道を基盤とする他の競技にはない日本独特の文化であるという捉え方。正しい、間違っているというのは置いておいて、そういう考え、意見が見られました。

今度は「修練観」です。「修練

というのはどういうものかといえば「終わりなきもの」だそうです。ここではラグビーをやっていた方にインタビューをしていますが、剣道というのは自分が指導者からの指導を通して感じているのは、自分自身がこれでいいというものがあるとは思えない。学び続けていかなければならないものと考えていました。そして探究的であるべきもの。エリート剣士たちの修練観では、道場だけで学ぶのが修練ではなく、道場外でも剣道に関わるすべてのものが修練であるという考えでした。いまクラブ指導者を対象に続けている研究もそうなのですが、クラブ運営にかかわること、指導にかかわること、自分の剣道にかかわること、これら剣道に関わることはすべて修練なんだ。お弟子さん、学生さんも同じ考えを話してくれました。



論文として報告しているのはここまでで、これからはあくまで補足です。データだけは整理しているので、報告します。

剣道はスタイルとしてどうあるべきかということですが、「流動的で美しい」「常にまっすぐ連続的に」という回答が得られました。その中には「日本の高校生・大学生のようになりたい」「なりたくない」という意見もみられました。

人間関係ですけれども、理想的な

人間関係はこうである、望ましくない人間関係はこうである、という考えを聞くことができました。今回は、こちらの望ましくない人間関係について紹介させていただきます。日本人の人間関係を見ていて、先輩が後輩に対していきすぎていると感じることがある。過去に先輩が後輩に自分の胸を磨かせていたり、自分の身の回りをさせていたりしているところを見たことがある。単に年が少し違うだけで、どうしてあそこまでやらせるのか理解できない。そのような人間関係は自分にとって不必要であり、学びたくない。自分が納得いかなかったらやりませんよ、行きませんよ、それだけですよという話もありました。

まとめに近くなりますが、大学生剣士の調査を経て、固有性というのとはもかく、国際的普及・発展について私が考えるのは、日本の運動文化としての剣道を普及・発展を目指すには、外国人剣士にも理解されるようにする方法を構築すべきだと考えています。インタビューでは、日本の剣道を学びたいのだけど、日本人になりたいというのではないのですよ、という正直な意見も聞かれました。剣道は大好き、アニメも大好き、黒沢映画も大好き、日本人の考え方も好き、だけでも朝から米を箸で食べたいとは思いません。日本人になりたいわけではないという意見もありました。私は椅子に座っているほうがいいです。いろんな例があります。

逆にいうなら日本人にしようという押し付けもあるのかなと感じました。これは私の研究テーマでもあるのですが、各国における事情、環境

について考慮し、それぞれの稽古のつながりや技能の発展過程について明確にした指導・修錬の方法論、方法の模索、構築が求められると考えます。外国人剣士が理解しがたい日本的剣道（人間関係をふくむ）の内容を明らかにし、方法を構築し、実践することが求められます。

今取り組んでいるのが指導者側の調査です。今日のテーマは「固有性」ということですが、外国にいたものとして、こういう調査を続けているものとしては、外から日本を見たり、日本から外国を見たり、いろんな視点でみることができます。やっぱり相対的にいろいろ考えるわけですね。昨日の懇親会での笑い話ですが、我々は「面（めん）」と発声しています。「面」という発声は、英語圏では「men（男たち）」に聞こえると。よく考えるとそういうことなんです。知らない人はそう感じるんです。私も何十回といろいろなところで演武をして笑われたことがあります。最初は頭にきましたけれど、よく考えると知らないと思ってしまうんですね。何かこれまでに見たことがない新しいものが出てきて、そこで「キエー」とか発声をしたりするとですね。たとえば「面（めん）」、剣道では「men」といいますといったら「えっ？」と思うと思います。そういう視点を改めて持つことが大切だと感じています。そして改めて剣道について考えさせられています。

最後になりますが、アレック・ベネット先生とはいろいろ仕事を一緒にさせていただいていますが、ベネット先生が編集長の「KENDO WORLD」があるのですが、2005年に発行された第3巻2号の表紙が非常

に印象的なんです。肌の色の違う、年齢も違う方などいろいろな方がイラストで描かれており、いろいろな国の方がいることを表しています。私は「剣道の素晴らしいところを教えてください」と言われたら、こういういろいろな方々と一緒に稽古できるし、学ぶことができることですと答えます。剣道の素晴らしさの一つはここにあると考えています。

「KENDO WORLD」にはまた、「CROSSING SWORDS & BORDERS」とも示されています。「剣を交えて国境を越えましょう」ということなのですが、ものすごいメッセージが表れていると思います。以上で私の報告を終わります。

司会：それでは質疑応答に移ります。

小林（新潟大） 剣道をはじめる動機、継続する動機を教えていただいたわけですが、イギリスの調査で、過去に武道の認識があった人の精神性についてお話がありましたが、その精神性の深さについてとらえ方が違うと思うのですが、精神性について深いと感じられることがあったら



お願いします。

本多 アンケート調査の残念なところは、細かい内容を個別に聞けないところですが、この結果で感じた精神性は「相手を倒す」ではなく「相手を思いやる」ということでした。あくまでも推測にすぎないのですが、エリート剣士を対象にした精神性は、たとえばですね、武士道の定義がありますが「二度目はチャンスがない」、「真剣のつもりで真剣に」という精神に惹かれているという結果が得られました。ただ仮説を修正しながらやっていくのですが、昨日の長尾先生の発表にもありましたが、よく分からない精神論に惹かれていたり、ステータスを感じたりしている部分もあるのかなあと思います、調査をしています。昨日のお話を聞いていても、固有性にしても普遍性にしても独自性にしてもまだまだ十分に自分たち自身が明確に理解できていないところがあると思います。よく分からない精神性を求めている自分にハイになっている修練者が多いと思います。「俺は、お前が知らないことをやっているんだぜ。俺もわかっていないけれど」というところが、マジカルなところであると思います、調査を進めています。現段階では勝手な考え方です。

大保木 (埼玉大) 今、おっしゃった「マジカルに、ハイに」というのは、私は自分のことを言われているのかと思いました(笑)。実は剣道を教わったときに、モノを切る世界を別に持っていました。山に行ってもものを切っていたので、サムライがやっていたことなのに(剣道は)なんでこんなことをやっているのだろう。足をポンと出したら倒れるだろ

う。おかしいじゃないかと思っ
て。でも何かあるに違いない(と思
いつつ)、でも何も見えないんで
す。八段の先生や範士の先生にお
うかがいするのですが、ようわから
んです。けど、(本当は)こうや、
と反発するものですから、そうい
うことやっている、マジカルなと
ころにいくというのは、実は外国人
ではなく、自分が外国人ではないか
と思ってしまうのです。

つたない経験ですが、イタリアに
指導にいった時、「あれをまともな
イタリア人と思ってくれるな」と
言われました。あの人たちはおか
しい。おかしい人がおかしいこと
をやるのだから仕方ないのだけ
れど、そういうことにすごく、自
分に惚れている人がいるといわれ
てびっくりしたのですが、そうす
ると自分と氣質が一緒だから合
ってしまったのかと思ったりもし
ます。塩入先生に「お前はだま
まっていれば大丈夫」と言われ
たこともあるんですけど、この
問題は私たちの問題ではないか
と思います。私たちが戦後外国
人として育てているので、私
たちが受けた教育は外国の教育
ですから、親は本



壁に前世代の人たちです。とのく
らい受け入れていくのかを剣道
というフィルターを通して、体
験的に知ろうと思うわけです。
先生のいまのお話を聞いてい
て思うのは、これ日本と同じ
ではないかという印象を持つ
のですが、いかがでしょうか。

本多 どうでしょうね。答えに
ならないかもしれませんが、「自分
は何も知らなかった」というお
話をしました。これからは剣道
の普及・発展に貢献していきたい
と思っ
ているのですが、いま現在では
学ばせていただいているという
のが正直なところ
です。

田中 それでは、塩入先生の
講演に移りたいと思います。い
ったん休憩
します。

太田 それでは2部に移り
ます。塩入先生は東京教育大学
英米文学科を卒業後、体育の
大学院にすすまれました。最初
は文部科学省で指導されました。
今まで何カ国行かれて指導さ
れた伺ったところ、20数カ国
という
こと
でした。世界各地での豊富な
体験を是非お伺いしたいと思
います。

塩入 塩入です。よろしく
お願い
いたします。

Ⅰ パネリストを引き受けた理由

最初にお話を頂いた時は荷が
重
いとお断りしたのですが、とう
とう捕まってしまいました。私
が外国人とのお付き合いが長
いということで、受けなければ
いけないのかなと思
直して、この席に立っております。
これからお話することは、な
にも断らない時はチリのこと
が頭にあると



思ってください。それを許していただきたいと思います。

私に与えられたテーマは「海外における剣道学習者が剣道に求めるもの」ということですが、外国剣士がなにを求めているのか調査したことはありません。本多先生のようにデータも持ちませんので、いままで付き合いしてきた外国人剣士との付き合いの中で、こんなふうに剣道を教えたろうまくいったという体験、あるいは彼らはこんなことを考えていたんだということをケーススタディ的に、私がやってきたことを紹介することで、皆さんに判断してもらいたいと思います。

II 自己紹介

私が外国人剣士とつきあいが始まったのは大学4年でした。大学院にいくわけですが、いまの全剣連の国際部は渉外部とっていました。1970年にIKFの設立のために日本武道館で国際親善剣道大会を開催したのですが、その組織作りのお手伝いをしたのが始まりです。当時、非常勤講師でフェンシングを教えにきていた先生に連れて行っていただきました。その後は大阪体育大学に勤

務してからは、第一回の世界大会開催があり、大阪で個人戦がありそこでお手伝いすることがありました。6年間の大阪勤務ではそのくらいで、またお手伝いをするのは埼玉に戻ってきてからでした。

その間に1978年から1979年にかけて10カ月間ですが、フランスのナショナルコーチをつとめました。本当は「文部省在外研究員乙種」で、滞在費を外国の受け入れ機関に負担してもらうもので、日本国内の給料と、渡航費はいただけるのですが、そうでないととても行ける状態ではありませんでした。競争もはげしかったです。午前中はフランス語学学校に通い、午後は指導。土曜は稽古が終わると、電車に乗りポルドーやリヨンやあちこち旅をしました。そこで旅行することと生活することの違いについて感じました。その内容については後ほどフランスの月刊誌「Bushido」の記者とのインタビューのところでお話しします。

III. 全日本剣道連盟 夏期指導者講習会

それから外国人の剣道の話しをするときに、外国剣士夏期講習会 (summer camp) を避けて通ることはできないでしょう。「北本 (Kitamoto)」を知らない外国人剣士はもぐりというくらい、外国人剣士に大きな影響を与えてきました。いま外国のリーダー的な人はほとんどサマーキャンプを経験していると思います。

この企画を始めたのは1975年で、イギリスの世界大会の1年前です。当時の国際剣道連盟事務総長の笠原利章先生が言いだして始まりましたが、最初の一週間は剣道、もう一週

間は居合でした。2週間みっちりやりました。先生方も必死に教える体制をつくりました。1976年にイギリスで大会があるので、その前年ということはかなり真剣に取り組みました。サマーキャンプに参加した先生は、日本のトップクラスの方ばかりでした。先生方も外国人と接してみても、最初は「外国人に剣道はわからないよ」という先入観を持っていましたが、2週間終わってみると「外国人もなかなかやるなあ。本気でやっているよ。日本人よりも意識が高いかも」と、偏見を大きく捨てて、そういう意識に大きく変わりました。私自身はチリに行く前、1975年から2008年の32年間、サマーキャンプ全日程参加させて頂きました。講師ではなく通訳です。そこで外国人剣士と接することを覚えました。サマーキャンプは稽古が終わった後、「3杯までは人格がない」と西川源内先生がおっしゃいましたが、稽古終わった後はビール3杯までは人のことを考えなくてよし、それからゆつくり話をせよ、というものでした。先生方もお酒を飲み、世界中の剣士と交流を深め、本格的な交流が始まりました。

サマーキャンプの第一の目標は、これはいまでも変わっていませんが、緊密な師弟関係を築くことでした。「ここに参加した人は俺の弟子にしてやる」「ここに参加した先生を一生自分の先生と思っていい」、そういう付き合いをしなさいというものでした。そういうことで始まったのがサマーキャンプでした。先生方も袴を脱いで、指導にあたりました。剣道の先生というのは普通、教えてくれないですよね。聞きに行ってもなかなか教えてくれない。「自

分で考えろ」です。アドバイスももらえない。ところが、そのサマーキャンプは先生方が一番「小さく打つにはこうする」「小手・面はこう打つんだ」など外国人に対して、自分はこうしてきたという、フランス語ではサボワフェール (Savoir Faire) というのですが、先生方の体験知を外国人たちに伝えました。私はそれに32年間携われて非常に幸せでした。サマーキャンプに参加させて頂いたおかげで、素晴らしい人間関係を築くこともできました。講師の先生方とも24時間一緒におりましたので、その中で一言、二言、いい話をしてくれる。トップシークレットのこともありましたが、それらを全剣連に返していこうと思いました。これは余談ですけど、第2回のサマーキャンプの時に、前会長の木村篤太郎先生が「心頭滅却すれば、火もまた涼し」と挨拶されたところ、のちの国際剣道連盟事務総長の佐藤勇先生がそれをサラサラと立て板に水のように翻訳されました。鳥肌が立ったのを覚えています。

ちょっと脱線しましたが、サマーキャンプでの外国人をみながら、外国における剣道修行者が何を求めているのか、何を指導したら彼らが喜んでくれるのかについてですが、以下が具体的な回答の一つになります。まず一番目は警視庁の先生方の型にはめる指導です。基本はばっちり型にはめ、稽古は自由奔放、個性豊かです。稽古での自由奔放さと、基本のはめかたの対照的なのが印象に残りました。警視庁の先生方がたくさん講師として見えられました。それと逆に地方出身の先生方の中には基本指導の中での独特の持ち味、大分の青木彦人先生、大阪

の甲斐利一先生、山口の古田坦先生、亡くなられた松元正清先生の基本、その分解指導ですね。私も資料を大分いただいています。もう一つは警視庁や国士舘などの大所帯をひきいた先生方の人間の大きさにいつも感銘を受けました。

外国人であれ、日本人であれ、指導者に求めるのは質の高い剣道と指導力ということになります。いずれにしても、全日本剣道連盟主催の講習会ではテーマが決まっていますが、サマーキャンプではそれが無く、先生方がトップシークレットの技も惜しみ無く教えてくれ、人間的に付き合ってくれたことに価値があったと思います。長い間つづいていることも海外剣道普及につながっていると思います。ただ一つ残念なのは、審判法と指導法が入った代わりに20年以上続いた居合の指導がプログラムから削られたことです。居合がやりたくて来ている外国人剣士もいますし、刀法などを学ぶ機会が無くなりました。居合の先生方も何も文句を言わない。それが残念です。

IV チリにおける指導とその剣道事情

続いてチリのお話をします。ざっと言いますと、チリの剣道人口は250人くらいです。二つ大きな道場があつて一つが80人くらい、もう片方が50人くらいでした。一週間に居合と杖道をまぜて11回稽古しました。日本にいて一番稽古したのが、埼玉大学剣道部女子が全国優勝する前の年で458回でしたが、ここでは1回だけです。それを上回る稽古回数になり、肩があがらず腰痛で動けなくなつたこともあります。

剣道先進国と剣道発展途上国との

大きな違いがあります。日本・韓国および組織のしっかりとしたヨーロッパの剣士たちと中南米のように自分たちで細々とやっている人々との違いです。別格のブラジルでさえ、第5回の世界大会時に3,000人以上あつた剣道人口が、今は600名程度と聞いています。中南米諸国にとって、大きなネックは、自前の昇段審査ができないことです。例えばチリの一番トップの剣道段位は四段の方です。自分たちだけでは初段の審査さえできません。昔の国際ルールでは二つ上の段をもっている人がいれば審査ができるという特例を設けていました。それができないからお金が集まらない。みんな他の国で審査を受けてしまいます。いまの日本でいえば体育協会からお金がでているのですが、微々たるものです。だからオリンピック種目になって、予算をつけてもらうというのも一つの方法だと思えます。

世界大会の時に剣道の昇段審査は行ないませんが、居合、杖道はない。私は居合、杖道の審査を開くようお願いしました。居合、杖道の先生もたくさん見に来ているのにやらない。私は理解できないのですが、剣道発展途上国に対する特別な配慮は大いに必要だと個人的に感じます。(スライド写真を見ながらの説明)

チリに話を戻します。この写真はチリ大地震の少し前なのですが、私が日本に帰る時、空港にこんなに大勢、人が来てくれました。

・これは剣道・居合の練習風景です。先ほど本多先生がおっしゃっていましたが子供から大人まで一緒になって稽古をしているのがわかると思います。



・これは私のスペイン語の先生です。週3回、途中から2回。専門はドイツ語でした。

チリは南北に長く、4300キロあります。南は東京からシンガポールで北はモスクワからマドリードくらいまでの長さです。世界中の気候がチリにあります。イギリスも島国ですが、チリも島国です。

・こちらは海で、こちらはアンデス山脈です。ただ気候は日本と逆で、下（すなわち南）はものすごく寒く、上（北部）は世界一乾燥した砂漠地帯で、とくに星がきれいです。南極に近いほうは寒くて雨が多いです。冬は雨ばかりですが、夏はぜんぜん雨が降りません。そのような気候でした。

・これは私の住んでいたマンションからの風景です。（写真）

・これは私と一緒に指導したJ A I C Aの隊員です。（写真）

・これはチリのクエカというスポーツで、サッカーと同じくらい人気があり、学校で教えている。びっくりしました。

・これは弟子の家です。（写真）

・これはサンタマリア、フランス語ではノートルダム、イタリア語ではマドンナです。（写真）私のアパートから10キロあるところですが、2月に一回かえって、12月までお百度参りをしようと思い、最後100回目にあつまった連中です。

・この写真は、腰が痛くて針を打ってもらっているところ。

・この構えを見て頂ければ分かりますが、非常に“かたい”ですね。チリは空手の出身者が多いのですが、かたい。

・これは杖道の指導風景。バスに乗ったらに食われて、大変でした。

・これは南アメリカ大会で準優勝した時の写真です。以前は誰もブラジルに勝てなかったのですが、4人勝ちしました。日系人が2人いましたが、その一人を試合前しぼりすぎたのが原因だったのか、アキレス腱を切ってしまいました。

・これは道場です。この稽古場は外より雨が降ると言われ、雨漏りがひどく、床もびしょびしょになってしまいました。コンクリートにマットをしいた道場でした。こんなところでやっていました。

・これはマーケットです。大分助かりました。

・これは私の弟子。

・これはの稽古です。制定杖の12本まで全部おぼえてくれました。現在は二段もいます。

・これは、一ヶ月かけて南部を巡回指導したときの写真です。初日にバスの中で、P Cから何からすべて盗まれました。悲しい思い出です。

・これは海です。世界で一番長い運河のようなところで泳ぎました。ものすごく寒いところでした。

・これはスキー場です。スキー場は4つあり、標高3600メートルくらいです。

・これはワインです。

・これはモアイ像です。これは津波で倒れましたが、日本からの援助で直しました。

・（写真）この地方は雪をかぶって

いる山があります。

以上、チリの紹介をしました。

V.指導の基本的スタンス

本題に戻りまして、自分は「どのように外国人に対して指導したか」ですが、まず、日本人と同じように教えよう、ということでした。最初は埼玉のある先生に「外国人に打たせたらだめだぞ。彼らは打つと本気で打つたと勘違いしてしまう」と言われました。

実際、第1回のサマーキャンプでフランス人と稽古し、少し手加減したのですが、そのフランス人は「塩入は弱い、塩入は弱い。散々たたいた」と言って廻っていました。外国人を教える時は打たせてはだめだ、と思っていて、そのことを小森園正雄先生に話したことがありました。そうしたら「馬鹿野郎」と言われ、「日本人の剣道人で、先生を打ったのか、打たせてもらったのか区別がつかないやつはいないだろう。それを上手に打たせるのが先生だ」と。

私の高校時代の師匠は本当に打たせるのが上手で、打った瞬間は「絶対に先生を打った。自分は強くなった」と思ったけれど、実際にはそんなことはないんですね。それをずっと先生が亡くなるまでそうでした。でも打った瞬間は「俺は打った。強くなった」と思わせてくれたすごい先生でした。佐藤成明先生のお父さん、佐藤金作先生です。

そういうことがあって、いずれにしても外国人は日本人と同じように教えよう、教えなくてはいけない、しまいには外国人に日本語を教えることも大切だと思いました。実際我々が外国の文化を勉強する時、学

ぶのは言葉です。私は他の剣道の先生のように剣道は教えられませんけど、言葉はいろいろなところで勉強させていただいていますので、ただ、説明してやる。

例えば先ほどの「胴をみがかせろ」ことについても、それが嫌で剣道を辞めてしまった人もいますが、1年間、私は防具を片付けさせませんでした。だけど2年目になってからは「あのな、片づけながら先生と話ができるんだよ」と説明し、「お風呂に一緒に入り背中を流すのも、先生と話してそこで教わることもできるんだよ」と伝えたら、すぐ理解しすんなり受け入れてくれました。

「大きな声を出せ」という問題もなぜかということ、私がいなくなった時、「先生がやれと言った、剣道はこうなんだよ」とhowだけ教えておけば、日本ならそれですみます。だけど外国人はそれだとわかる人もいるし、わからない人もいます。

これは一番最後に話そうと思ったことですが、ある外国人に「剣道の一番いいところは、先生から教わったことが何年かたったあとに理解でき、気付くことなんです」と言われました。私も学生時代、清野先生から形を教わって、「上段は肩を引き上げろ」とそればかり言われまして、全然分からなかったのですが、30年たって「そういうことか」と分かったような気がする。そういうことがあります。ですから、日本人と同じように教え、できるかぎり、whyを教える。我々が帰国した後も自分たちで考えながらできるようにすることが大切と考えています。

もう一点は個別指導です。個別指導は一定時間の団体の中だけでやる

のでは無く、生徒より早く道場に着いていますとぼちぼち人が集まってくる。この時に素振りを見てやったり、「一緒に剣道形をやろうか」みたいに、個別指導をしっかりとやるようにしました。

全体の指導のなかでは、大阪体育大に在籍時に、師範の杉江憲先生から、「特に上の人間（上級生）を鍛えろ」と言われました。「あいつら（上級生）は楽をしている。だからコテンパンに鍛えろ。警察の特練に入れば、あいつらはぺいぺい。それがふんぞりかっているのはけしからん。」と言われ、先生は4年生をすぐ鍛えていました。

あるいは皇宮の加藤浩二先生からは「おい塩ちゃん、真ん中を鍛えろんだよ。真ん中を鍛えれば上は押し上げられるし、下も引き上げられる。だから真ん中を鍛えろ」。角正武先生は「上を鍛えろ」と。私はそれはできませんので、まんべんなく、と思ってやっていますが、上級者を休ませないというのは外国人も一緒だと思います。

とくに笠原先生から「外国人を指導する時は、連盟の核となる人間、若手を指導する。どうしても自分と同じくらいの人間を指導したくありません。若いやつを育てないといけません」と言われたのですが、それを重視していました。

それと「審判法」です。世界大会の審判、全日本選手権の審判をみて、一本の基準が上がっているように感じます。でも、外国人剣士を指導する時、だれが見ても一本と言うのしか取れない。志藤先生から教えて頂いたことですが「あれもダメ、これもダメではダメで、60パーセントの打ちを一本にするのが良い指導

者なのだ」と言われました。「その次に同じところを打てば65パーセントになり、70パーセントになり、と上がってゆく」。そのことをしく言いました。

審判に関しては、試合場でナショナルチームを率いて、（外で座っているのですが、）自分で一本と思ったら、手を上げたりしていました。「俺はこれは一本だと思うよ」ということを外国人に伝えるようにしていました。「こんなのを一本にしなかつたら返し胴やる人間いなくなるよ、すり上げ小手やる人間いなくなるよ」とも言いました。台湾の世界大会では、相手の選手の技が完全にバチンと鏢を打っているのに「小手あり」で一本とされて、チリ選手の悔しさがよくわかりました。大会では、その都度、審判を呼びつけて、みっちりやりました。非常に上手になったと思います。自信を持って出来るようになったと思います。そんなのも良いかもしれません。

あとは「日本の文化を教える」。フランスにいった時、雑誌記者から言われました。「お前は何を教えるんだ。技術か？ フランスには柔道も空手も世界チャンピオンがたくさんいる。技だけだったら日本から指導者を呼ばなくていい時代が必ずくる」。私は「剣道には精神的なものがある」と言いました。「では、精神的なものはなんだ？」と聞かれました。一晩考えました。結局は、「チャンピオンだって初心者だよ」と言いました。そうしたらびっくりしていました。チャンピオンは最高なものです。でも剣道の世界では若手の全日本チャンピオンでも、大先生方には子供扱いされているよ、ここで剣道をやめてしまったら

どんどん抜かされてしまうと。いずれ初心者と同じようになる。どこにいても自分が目標となる人がいる。それが満たされたらフランスは日本を超えることになる。そう逃げたのですけど、それが大事なこともしれません。

先ほど日本の文化を伝えるというのですが、昔の先生の話をする時は「くまのジャンケン」、高野先生はあんな手です。相手が打たないうちから手が上がりはじめ、ゆっくり手が上がり終わったときには打突が当たっている、というのです。なんでわかるのだろう・・・と。いろいろな先生の話を通して、剣道を考えて欲しい。こうなって欲しい。日本の剣道文化を伝えられると思いました。

それからもう一つは、竹刀打ちの剣道だけでなく、「の文化」を教える。剣道形、居合、杖道などありますが、同じことやっているようで中身が違う。簡単そうにみえてものすごく難しい。それがわかると形のものになってしまう。外国人が好きなので、日本人よりのめりこんでしまう。「」をしっかりと教えておく必要があると思いました。

先ほど紹介した彼は杖道と居合で二段になりましたが、剣道の気分を味わえる。私は「一つの道場では三道をしないといけない」と言っていたのですが、杖道、居合だけを稽古する者の入門も認めるようになりました。いまフランスはスポーツチャンバラがはやっているようですが、そこでいいの（スポーツチャンバラで実績のある人）を剣道にスカウトしているそうです。

VI まとめにかえて

最後、まとめます。結局は人です。先生方の良さに戻っていくといます。さっき何年かあとにわかるといましたが、剣道で一番難しいのは何だ。道場のドアを開けること。稽古さえしておけば、自分にあった剣道ができるようになる。剣道はラーメンでいい。札幌ラーメン、佐野ラーメン、喜多方ラーメンがあつていい。土地固有のものがあつていい。剣道も同じで、その土地つまり固有のものがあつて、剣道のよさを発信する。種をまくのが我々で、刈り取るのは現地の彼ら。どんどんその良さを我々日本人が発信していくことが義務だと思います。すみません、時間切れでまとめきれないですが、終わりにします。

太田 では質問どうぞ。

植原（國學院大学） 師弟関係は日本の固有性だと思います。外国人に受け入れられるとすれば、どんな感じの師弟関係があるのでしょうか。

塩入 私は外国人に指導する際、「一生付き合うつもり」で接します。30年続いている人もいます。たとえばチリで教えた人間も、これから先、縁が切れるのではないのです。試合をした、審査に落ちた、そのたびに動画を送ってきます。それを採点したりしています。一日十通くらいメールがきています。いまのIT技術をつかえば、付き合いができると思います。これは受け入れ側の問題だと思います。

田中 本多先生、塩入先生、お時間を急かしてしまつたようで申し訳あ

りません。

「剣道の固有性を考える」という本日のテーマを頭に置きながら両先生のお話をうかがっておりました。個人的には、本多先生のお話では、「外国人が日本の文化を学びたいと思っても、日本人になりたいわけではない」という言葉が心に残りました。外国人からの質問に対し、時に「日本人にしか剣道の本質は解らない」「剣道をより良く理解するためには、日本人に成りきらねばならない」というニュアンスの回答がなされる場面があることを否定できないのではないのでしょうか。やはり、彼らが何を求めて剣道に取り組むのかを正しく理解することが重要であると思いました。

あわせて塩入先生のご講演では、こうあるべきと押し付けるのではなく、師弟同行の関係の中で自然と教え教わり合い、求め合い、高め合い、伝え合うことが重要であり、それが固有性をより良く伝え、普遍性生むことにつながるのだということであらためて勉強させていただきました。

これで終了いたします。最後に、お二人の先生に盛大な拍手をお願いします。本日は誠にありがとうございました。



平成23年度剣道専門分科会研究会

「日本学としての武道」 山地征典

ハンガリー・エトヴェシュ・ロラード大学・東アジア研究所

Eötvös Loránd University, Institute of East Asian Studies (Budapest)

平成24年3月17日（土）講道館会議室

司会（酒井先生：筑波大学）：それでは、山地先生にお話を頂く前に、剣道専門分科会幹事長の長尾先生からご挨拶をお願い致したく思います。

長尾（明治大学）：山地先生、本日は誠に有難う御座います。これから始まる講演を非常に楽しみにしております。先生にお会いするのは20年振りです。筑波で一度お目にかかって以来です。我々は、毎年一度研究会を開催しております。その時々により内容は変わる訳ではありますが、昨年来、文化の固有性・普遍性というのを学会本体でも大きなテーマとして取り上げております。その中で今年度の研究会でも、そのようなテーマを浮き彫りに出来る様にしたいということで、幹事各自が、それぞれがどんな方をお願いしたら良いかアイデアを色々持ち寄ったわけですが、その中でも酒井先生から山地先生の長年の経験と実績をお話し頂けたら良いのではという提案が出ました。そして満場一致で皆賛成し、本日を目出度く迎える事が出来た次第です。私事で大変恐縮ですが、私は明治大学の国際日本学部で教鞭を取っております。明治大学が国際と名の付く学部で、卒業生を初めて出したばかりなのですが、学部がこじんまりしておりますので教授会もこじんまりとしており、それ

ぞれの日本の文化や社会システムを、グローバルな観点から見直すということで集まっております。私もそこでは、知的な刺激を受け喚起しております。そういう中で、山地先生をお招きし今日という日を迎えることが出来、大変嬉しく思っております。本来であれば、分科会の会長である茨城大学の異教授からご挨拶して頂くのが筋ではございますが、私から簡単に、今回の趣旨をお話しいたしましてご挨拶に代えさせていただきます。山地先生、どうぞ宜しくお願い致します。

司会：それでは、私の方から山地先生についてご紹介させて頂きたいと思います。

山地先生はハンガリーのエトヴェシュ・ロラード大学（通称・ブダペスト大学）の東アジア研究所においてアドバイザーをされています。1994年のお生まれで、1968年に大阪外国語大学をご卒業後、テヘラン大学に留学されました。その後ハンガリーに渡られ、1973年にエトヴェシュ・ロラード大学、通称ブダペスト大学で教壇に立ち、2011年まで教鞭をとっておられました。研究分野につきましては、お手元の資料に記載させて頂きました。そちらには記載されていないのですが、先生のご研究の中で特筆すべきものと致し

ましては、1997年7月にアジア・北アフリカ国際会議と言いまして、人文科学では間違いなく世界一大きな会議ですが、それがブダペストで開催される際に、山地先生は日本学の中で武道学と言うものを取り上げてそれをシンポジウムにされることにご尽力されましたことをご紹介させていただきます。本日は「日本学としての武道」というテーマで一時間程ご講義頂き、その後にご質問などを受けたいと思います。それでは山地先生、宜しくお願い致します。

山地：本日、「日本学としての武道」と題してお話するようにとの誠に光栄な機会をお与え頂き、この機会をお作り頂きました筑波大学の酒井先生を始め武道学会の諸先生方に心から御礼申し上げます。

昨年11月に酒井先生からemailにてこのお話がありました時、もう20年余り前のことになりますが、1991年の5月から1992年の6月まで、一年余り、国際交流基金の日本研究フェローシップ特別研究員として筑波大学で佐藤成明先生、入江康平先生、香田郡秀先生を始め鹿島神流の関文威先生等、諸先生方のご懇意なご指導を頂き、毎日、学生の皆さんに混じって武道学の勉強と、剣道と古流の稽古をさせて頂きましたことが、昨日のこのように全身一杯に蘇っ

てきまして、しばらく感慨に浸るばかりでした。

さて、本日の題目「日本学としての武道」は色々な角度から取り上げることが出来るかと思いますが、酒井先生の今回のご依頼の趣旨から察しまして、始めに私がハンガリーで武道研究に至りました経緯と、私自身、何故、武道研究が日本研究にとって、特に日本を外から見まして、重要な意義を持つと考えるに至ったかについてお話しさせて頂き、最後に、「日本学とは何か」をヨーロッパの学問体系の中に見て、「日本学としての武道」の意味と位置づけに付いてお話しさせて頂きたいと思います。

I. ハンガリーとの出会いと武道研究に至る道

ハンガリーとの出会い

私がハンガリーと出会いましたのは、全く偶然のことで、大阪外国語大学（現大阪大学外国語学部）で学びましたペルシャ語とイラン文学研究の目的で、大学卒業後2年ばかり務めておりました大阪の毎日放送を1970年の秋に休職して、テヘラン大学の外国人留学生博士課程へ留学したのが切っ掛けでした。運命の巡り合わせと申しましょうか、そこで同じくハンガリーから留学しておりました女性イラン学者と知り合い、結婚することになったのがハンガリーとの出会いの始まりで、留学2年修了後、折角のことですから社会主義国の様子と妻の勤めているハンガリー科学アカデミーの東洋文庫を見て帰ろうと思い、1972年6月に、テヘランからウイーンへ飛び、ウイーンからは車で、当時、社会主義国家とし

て、遮断機と機関銃を構えた国境監視兵の厳しい監視の下、“ハンガリー人民共和国”（今は単にハンガリー国）に入国しました。国境の町 Győr（ジェル）で一年先に帰国しておりました妻と落ち合い、彼女の案内で田園風景の中に村や町並みを見ながら交通量のほとんどない街道を4時間ばかり走って、首都ブダペストに到着。ブダペストに落ち着いて間もなく、妻の紹介で、日本では通称ブダペスト大学として知られていませぬ Eötvös Loránd 大学、略称 ELTE の外国人留学生のためのハンガリー語集中コースに特別に入れてもらい、ハンガリー語の勉強を始めたのですが、その傍ら妻の勤めるハンガリー科学アカデミーの東洋文庫でハンガリーの東洋学の伝統に触れておりましたうちに、当初予定しておりましたハンガリー滞在1年があつという間に過ぎてしまいました。この間、休職が2年以上にもなってしまいました毎日放送はこれ以上の無理も出来ないと云うことで、依願退職、さて、これからどうしようかと思っておりました時に、幸いにも、その翌年、1973年秋の新学期から、ELTEの中国・東アジア講座で、自由選択科目としての日本語を教えなかと云われ、こうして、思ってもみなかった、私の40年に亘るハンガリーでの教員生活が始まりました。

武道研究に至る道

教員生活一年目はハンガリー語もまだよく出来ず、授業中に質問されても、質問自体がよく分からない上、説明もハンガリー語では良く出来ませんでしたので、どうしたものかと思いましたが、幸いに授業は週一回90分で、準備に充分時間があり

ましたから、毎回一週間かけて、妻の助けで（当時、妻との共通語はペルシャ語でしたが、ペルシャ語で国文法を説明）90分一杯のハンガリー語の原稿を作り、それを俳優の台詞のように丸暗記いたしまして、授業時間一杯、丸暗記したハンガリー語の説明を一方的に行い、そして、日本語の練習をこなし、最後に「質問ありませんか？……はい、それまで」と、ハンガリーの学生さんが控えめなのを良いことに、質問する暇をも与えずに授業を切り上げるという、苦肉の策で、何とか切り抜けました。

2年目に入りますと、1年間のハンガリー語講義の丸暗記方式の効果があつたものか、ハンガリー語もかなり分かるようになりまして、学生にも質問の機会を多く与えるように心がけましたところ、授業の後にもいろいろ聞きに来る学生が増えまして、例えば、

「したら、するなら、すると、すれば」はそれぞれどう違うのか、とか、「私が」と「私は」の使い方の違いは何かを始め、日本人としては当たり前のこととして通り過ぎてきた色々なことが、いざ、質問されて、説明するとなると、国語学の説明だけではなかなか分かってもらえないことが次々と出てきまして、直ぐには応えられず、その都度、「来



週までに調べてくる」と、一週間勉強をして、翌週に説明をするといったことが度々でした。

こうしたことの繰り返しが私自身の言語学の勉強になったことは言うまでもありませんが、日本語を勉強する学生が増えてくる内に、文学や歴史についても勉強したいという学生も出てきて、当時、日本学専攻はまだありませんでしたので、講座主任のチョンゴル先生の特別の許可を得まして、自由選択科目としての日本文学史と日本史の授業もすることになりました。授業は、学生の日本語読解力の向上と私自身のよい勉強の機会と考えまして、文献講読の形でおこなうこととして、日本を出るときに持って来ました若干の日本史、日本文学史の教科書と、大学で教え始めてから親に頼んで日本から送ってもらいました、より専門的な大学の概説書、例えば、久松潜一「国文学」、吉田精一編「日本文学概説」、市古貞次「日本文学史概説」、高木市之助「日本文学の歴史」、井上光貞「日本史入門」、豊田武「概説日本歴史」、石田一良「日本思想史概論」、相良亨「日本思想史入門」、永原慶二編「日本経済史」等と、この他、大学の図書室にありました若干の専門書、例えば、和辻哲郎「日本古代文化」などを使って、希望者と一緒に読みながら、出てくる質問にその都度答える形で授業を進めたのですが、この授業でも日本語の授業と同じく、十二分に準備して来ているつもりでも、例えば、蕉風俳諧の理念「わび（侘び）、さび（寂）、しほり（撓）」、藤原俊成の歌論書「古来風体抄」の基本概念「幽玄」や藤原

定家の主張する「有心体」等という日本文学史の様々な基本概念や日本史、日本思想史の基礎概念を始め「日本的思考の特徴」や「それぞれの時代の基礎をなす社会倫理」等と、いざ質問されるとなかなかハンガリー語では説明できないことが次々と出てきて、（例えば、ロシア語訳から日本文学を翻訳しているという人で「寂び」を「淋しい」と思い込んでいて、説明してもなかなか納得してくれない人がいたりしましたが）、このように、ハンガリー語にない専門用語に基づく色々な問題の説明を、その本質を損なわずに如何にしてハンガリー語で正しく伝えることが出来るか、なかなか簡単には説明しきれないことが多く、宿題が増える一方でした。

体制変換後、日本へ行くことも自由になり、また、インターネットなどで情報の増えてきました最近では余り出くわすことはなくなりましたが、最初の頃は、例えば、「葉隠」などを聞きかじって「武士道と云うは死ぬことと見つけたり」を「日本人は死を理想に思っている」などと解釈して、「自分も死を恐れないサムライである」などと日本に対する変な憧れをまじめに披瀝する人に尋ねてこられたりして戸惑うこともありましたが、言葉と伝統を異にする外国の人たちに、正しく日本の歴史、日本の精神文化を伝えることの如何に難しいかを教えられた次第です。特に、私が教え始めました最初の頃、1970年代初には、大学にも、科学アカデミーの東洋文庫にも日本関係の専門図書はほとんど無く、前に触れましたような、日本を出るときに必要なものや父親に頼んで日

本から送ってもらった若干の専門書に頼るしかない状況でしたが、幸いにも1972年に創設されました国際交流基金の図書寄贈助成プログラムが基金創設翌年にスタートし、1975年度からはハンガリーからも申請が可能となり、毎年科学アカデミーの東洋文庫とELTEの中国・東アジア講座のために申請図書のリスト作りを仰せつけられまして、国語学、国文学、国史学（今では、日本語、日本文学、日本歴史と言うべきかも知れませんが）を中心分野として、体系的に、基本専門文献と、史料/資料集の収集を開始しました。そして、徐々に、例えば、「群書類従完成会 群書類従 正、続、続々」、「岩波 中世法制史料集」、「岩波 日本古典文学大系100巻」、「岩波 新日本古典文学大系 105巻」、「岩波 日本思想大系60巻」、鈴木学術財団「大日本佛教全書100巻」（これは薬師寺元館長の松久保秀胤師のご配慮により、酬仏恩講の皆さんの篤志による後年の寄贈）、この他、「新釈漢文大系120巻」、「吉川弘文館 新訂増補国史大系普及版27冊」、「吉川弘文館 日本隨筆大成 I.II.III. 期」、「有精堂 日本文学研究資料集」、「東京大学史料編纂所 大日本古文書」などといった基本資料集の収集が出来ることになり、それまで *Acta Orientalia Hungarica* などといったハンガリーの学術誌と交換で日本から寄贈されて、科学アカデミー東洋文庫に収蔵されていましたが、国語学会（2004年から日本語学会と改名）編集の「国語学」や日本歴史学会編集の「日本歴史」といった学会誌と主要大学の研究誌のバックナンバーとを併せて、ハンガリーでの日本研究の背景

作りが何とか整い出しまして、その時の中国・東アジア講座主任、チョンゴル先生の後を継がれた、ガラ先生（専門は中国現代文学）を日本専攻兼任主任とし、ガラ先生の全般に亘る支援の下に、ELTEの学問伝統を踏まえた教育プログラムを作成いたしました。大学会議での審査に通過、1986年の秋学期から、ハンガリーで初めての5年制MAの日本学専攻の本格的な日本研究と教育を始めることになりました。(1)

この間、集めることの出来た資料集、専門図書のおかげで、私自身もハンガリー科学アカデミー所属のKőrösi Csoma (ケーレシ・チョマ) 東洋学会の企画致しました「語学書シリーズ」や「アジア諸国の歴史シリーズ」に日本語教科書と日本史を纏めました(2)、授業での学生さんからの質問にもまして、日本の歴史と文化について書くことになりまして、それぞれ専門書を読んでいます中に、気付いたことなのですが、700年もの長期に亘る武家支配を実現し、政治史のみならず文化史、社会史の面においても歴史的に直接に今日の日本の基礎を築いたともいえる武士自身については、どの専門書も、殆ど、その戦いに明け暮れる姿のみが政治史の流れに沿って取り上げられるばかりで(特にこのことは、外国で一般にもはやされている武士関係の出版物に、その顕著なものが見られますが)、武士支配を築きあげてきた彼らの行動を規定する、彼ら自らの体験を通じて生み出してきた彼ら自身の思想の精神的な研究、特に彼ら自身の言葉で、彼ら自身によって書かれた資料に基

づく研究がほとんどなされていないのではないかと思ったことです。

しかし、最初の頃は、これはハンガリーで、わずかなものしか見ることの出来ない、私の勉強不足が原因かと思っておりましたが、発刊の年から少し遅れて、東方学会から中国・東アジア講座に送られてきましたActa Asiatica 49号Studies on Bushi (samurai) という特集号(1985年)を手にすることが出来まして、その中で、特集号の編集をされました尾藤正英先生が巻頭の序文に、「侍、武士」という言葉が今日でも日本の日常生活に於いて全くポジティブな良い意味で使われることに触れられた後、次のように書いておられるのを読みしました。

”..... The samurai or bushi, who left such an imprint on the mind of the modern Japanese, emerged around the tenth century and continued to play an important role both socially and politically for almost one thousand years until the abolition of the class at the time of the Meiji Restoration. As such they gave to Japanese history some of its most distinctive characteristics. Despite this fact, past studies in Japanese history, whether by Japanese or by foreigners, have not necessarily given due attention to the distinctive characteristics of the bushi. While more true outside academia than in, there are cases where the bushi are regarded simply as rude warriors who were the source of the aggressive militarism of modern Japan. In other cases the bushi are regarded as feudal lords or as

members of ruling class whose interest were totally opposed to those of the ordinary populace. These views, however, reflect only one facet of the bushi. To grasp the total dimensions of the bushi accurately and to appraise correctly the legacy bequeathed by the bushi to modern Japan remains a task for the future.”

[..... 現代日本人の頭の中にこのような印象を残した「侍」または「武士」は十世紀頃に現れ、明治維新に至って武士階級が廃止されるに至るまでのおよそ一千年に亘って社会的、政治的両面に亘り重要な役割を演じ続けた。このように彼らは日本の歴史に、ある種の最も独特な特徴を与えた。この事実にもかかわらず、日本歴史のこれまでの研究は、日本人によると外国人によるとにかかわらず、武士の独特な特徴に対する当然しかるべき注意が必ずしも払われていない。日本国内よりも外国の学界に於いてよりそうなのであるが、「武士」を現代日本のアグレッシブな軍国主義の源泉である単なる野蛮な戦士と見るケースが多い。また他のケースでは「武士」はその利害関心が平民のそれとは全く相反する封建領主または支配階級のメンバーとしてみられる。しかし、これらの見解は「武士」のただ一面を反映するだけである。「武士」の全体像を正確に捉え、そして「武士」によって現代日本に残された遺産を正しく評価することは将来に残された課題である。](山地訳)

と、このように、“侍”特集号編集の理由が、それまで私が“感じていた”のと全く同じ理由からであり、まるで“その通りだ、その欠けているところを研究するのだ”と、あたかも、尾藤先生から格別の励ましのお言葉を頂いたかのように大いに励まされた次第ですが、掲載されている論文を見ますと(3)、武士自身の思想研究が依然として欠けているのではないかと思われ、改めて武士の思想の彼ら自らの書き残したものに基づく研究が必要だとの思いを強めた次第で

す。

次に、それでは、この問題の切り口は何かと色々考えたのですが、武士が武士のあり方として尊ぶことの思想的背景は、武士としてのアイデンティティーを表す言葉の吟味を通じて分るのではないかと考え、武士を示す言葉を集めてみました：

“もののふ武士（物部の転訛）”、“ぶじん武人”、“弓矢取り”、“弓矢取りの道”、“兵馬の道”、“兵法”、“兵法者”、“武芸”、“武術”、“武術者”、“武家”、“武道”、“(武)士道”、“文武両道”等々

そして、これらの中で、“兵法”が、特に室町時代（1336－1573）の終わり頃から武士の欠かすことの出来ない能力として強調されだし、江戸時代に入ってから“武術”、“(武)士道”、“文武両道”といった言葉も武士にとっての重要な言葉として強調され出して来るようになります。

武士の「文武両道」は、古くは「平家物語」（1240以前に成立？）に“あっぱれ、文武二道の達者かな”（巻七：願書）と「文武二道に通じること」が、まだ単なる賞嘆の意味ではありますが、登場し、時代が下がって、徳川時代になりますと、徳川家康の「武家諸法度」第一条(1615年)に見られますように“文武弓馬の道専一に相嗜むべきこと”と「文」とともに「武」が武士の義務かつ基本的なたしなみとして公に強調され、しかも様々な「武術」の中で「兵法」すなわち「剣術」が筆頭に据えられて、家康自身が奥平心陰流を学び、息子と孫には柳生宗矩を兵法師範として特別に採用するなど「武」、中でも「兵法」の意識的か

つ積極的な評価がなされるようになったことが分ります。しかも、これは、国家の平定統一が遂げられ、また、16世紀以降、鉄砲と大筒が広まり、それらの前では刀を始め、伝統的な武器には殆ど勝ち目がないことが知られる時代に入つての話です。⁽⁴⁾

また、「弓矢取りの道」、「兵馬の道」、「文武両道」の「道（みち、どう）」についてみますと、武士にとってこの「道（みち、どう）」とは何を意味するか、この基本概念としての吟味も欠かすことが出来ませんが、それと同時に、「道（みち、どう）」の言葉が示す精神的なものを伴う実践的側面の究明が不可欠であることが分ります。

このように研究の基本的方向がクリヤーされてきますと、研究の基である資料の問題が出てきますが、私の考えます研究方向からしますと、文学書とか国史大系などに見られるようなものではなく、例えば、能役者が自分の実践を通じて構築した思考世界を書き留めている世阿弥の「風姿花伝」のような、自らの実践を通じて築き上げて来た武士独自の思想世界を書き残している資料はあるのか、とすることになるわけですが、前に触れました学術誌を始め、収集できた諸文献を調べ尽くして結局行き着いた答えはごく簡単で、そのためには日本へ行くしかないということなのですが、当時、日本人がハンガリーへ留学するのではなく、日本へ留学するというのは思いもよらないことで、残念ながら、ギブアップと置いていましたところ、再度、思いがけない幸運に恵まれて、国際交流基金が規則を変更、1991年度分からフェローシップに海

外長期滞在の日本人研究者も応募出来ることとなり、1987年に初代客員教授としてお越し頂いて以来、ご指導を頂いておりました福田秀一先生と1986年から2年毎に派遣して頂いた全剣連剣道使節団のことでお世話になりました国際剣道連盟事務局長佐藤勇先生のご仲介で渡辺一郎先生、佐藤成明先生、入江康平先生にご紹介して頂き、佐藤先生と入江先生には、推薦者と受け入れ教官になって頂きました。また、京都の日本文化研究センター教授の白幡洋三郎先生、そして、福田秀一先生、それに直接の上司である中国・東アジア講座主任のガラ・エンドレ先生の計5名の先生方の推薦状を頂き「日本的思考－武道思想－及び古流の研究」のテーマで応募、幸いにも採用されて、始めに触れさせて頂きましたように、1991年の春から1992年の初夏までの1年余り筑波大学で大変有益な研究と実践の生活を過ごさせて頂き、ハンガリーにおける「武道思想研究」の基礎作りをさせて頂きました次第です。⁽⁵⁾

留学が終わりに近づいた頃、昔の上司の毎日放送斉藤守慶会長から大変有り難い資金援助を頂き、入江先生のご配慮で武道学研究の主要基本文献及び「日本武道大系 全10巻」等の資料集からなる「毎日放送寄贈武道文庫」を集めることが出来たの



ですが、この文庫は今日までハンガリー武道研究の第一の拠り所となっています。

1992年6月に留学を終えましてブダペストに戻った後、フェローシップの成果を纏めながら、ハンガリーへの武道研究の紹介を意図しまして、Kőrösi Csoma東洋学会での発表の他、幾つかの論文を学会の専門誌、「Keletkutatás東方研究」等に書きましてハンガリーに武道研究の紹介を始めたのですが⁽⁶⁾、1993年に、“Bu武, avagy a szamurájok gondolatvilágáról – forrástanulmányok a japán művelődéstörténethez”[武、即ち武士の思考世界について—日本文化史のための資料研究]と題するカンディデート(PhD)学位請求論文をハンガリー科学アカデミーの学位認定委員会へ提出、受理され、武道研究が日本学研究の主な分野の一つとしてハンガリーの学界に認められる第一歩を進めることが出来ました。この後、数度、ハンブルグ大学と共催で日本学の国際会議を開催、その中で武道関係としましては“A Literature, Culture and Society in Medieval and Early modern Japan”(Sponsored by the Japan Foundation, 1996.)と題する学会で、“Ainuke – a szamurájok Bugondolata Kodegiri Ichiun Szekiunrjú kendzsucuso alapján [相抜け—小出切一雲：「夕雲流剣術書」に見る武士思想]を発表、言語と文学を専門としておられるハンブルグ大学日本学科主任のRoland Schneider先生を始め、参加されたヨーロッパの先生方に武道研究の一端に触れて頂く機会を得ましたが、1997年7月にブダペストで第35回世

界アジア北アフリカ研究者会議(The 35th ICANAS)が開催されました折に、日本学セクションの組織を担当することになりまして、筑波大学でお知り合いになりました神戸学院大学の前林清和先生に提案、賛同を得まして、パネル「武道学—意義と展望 Budo Studies – Meaning and Perspective」を企画、高橋進先生の積極的なバックアップを得まして、日本から高橋先生、前林先生の他、入江先生、酒井先生等、9名、ハンガリーからは山地、阿部先生、Szabo Balazs君3名の参加で、成功裏に開催することが出来ましたことは、ハンガリーのみならず広く海外に武道研究如何の紹介にとって大変意義ある会議でありました。本企画を当初から支援していただき、パネルの発表を熱心にお聞き頂きました、当時の在ハンガリー日本大使、田中大使から会議終了後のパーティーの時に大変有意義であったとの評価を頂きましたが、ハンガリー人の日本研究者、学生の関心も引いたようで、Szabo Balazs君は、この後、少し合気道で回り道をしましたが、2007年に卒論を提出、日本学MAを卒業、その後、直ぐに、前年、2006年にスタートさせる事の出来た日本文献学博士課程に入り、合気道をしていることから、私の勧めました「柔術伝書の研究」のテーマで研究を進め、昨年1月に、無事、日本学のPhD学位を取り、現在日本学専攻の責任者として学科運営に当たっています。これも第35回ICANAS会議武道学パネルの貴重な成果の一つであろうかと思われませんが、武道学パネル会議の発表成果は前林先生のご尽力で「武と知の新しい地平≪体系的武道学研究を目指して≫」と題し、昭和堂から

1998年に出版されまして、思想史の大隅和雄先生を始め、その後日本学講座に客員教授としてお越し頂きました諸先生方にも紹介しましたところ、「これまで気づかなかった、重要な研究である」と皆さんに評価されました。ここで、お詫びをかねて触れておかなばならないことなのですが、会議の時の計画では発表論文集の英語版を私どもの方で作成することになっておりまして、高橋先生からは早速に「日本の武道と伝統文化」の英訳原稿をお送り頂き、編集の準備を進めていたのですが、英訳を担当することになっておりました、日本語が大変優秀で日本文学や文学評論の翻訳出版を見事にしており、しかも、英語科も出ていて英語のよく出来る私の元学生でその時の同僚に英訳を分担してもらっていたのですが、やはり漢文と武道思想に関する用語の英訳に問題が出てきて、英訳が遅々として進まずにありましたところ、彼自身が病気になってしまい、とうとう英訳版は今もって出版できずにおります次第です。是非ハンガリーの皆さんを始め、多くの人に読んでもらいたく思っているのですが、出来れば武道研究を専門にしていますSzabo君と一緒に、まず、ハンガリー語版を作り、それを基に英訳版の作成にトライするのがいいのではないかなど目下考えております。

私が武道教育の重要さに気づかされました今一つの経験、ハンガリー剣道の歴史については今回は詳しく触れる時間はありませんが⁽⁷⁾、1982年に、これも偶然の切っ掛けから、ハンガリーの人たちに剣道を教えることになり、1985年にはハンガリー

剣道連盟を作り、1986年から2年ごとにお越し頂いた全剣連剣道使節団（第一回使節団のメンバーのお一人に筑波大学の香田郡秀先生がおられました）の先生方のご指導と、1992年から2006年まで続いたJOCV剣道隊員の皆さん、また、1996年からは太田昌孝先生に率いられた剣道使節団の諸先生、学生のみなさん、中でも、JOCV第一次剣道隊員としてこられた後、ハンガリーに定住して足かけ20年、ハンガリー剣道連盟技術局長として今もハンガリー剣道の発展に尽くして頂いております阿部哲史、剣道教士7段（阿部先生の関係で、酒井先生をはじめ、筑波大学関係の若手諸先生方にも来洪頂く）、等の皆さんの献身的なご支援とご努力を得まして、ハンガリー剣道はヨーロッパ大会でも優勝するところまでに発展、定着してきました⁸⁾。

尚、ハンガリー剣道の草創期に当たりましては、本日ご出席いただいております津嶋冠治大使の、当時、文化担当一等書記官としてのハンガリーへのご赴任を特記しなければなりません。ご赴任早々に稽古にご参加いただき、二人して、初めて剣道らしい稽古をハンガリーのみなさんに紹介することが出来たのですが、上記の全剣連使節団派遣の実現を始め、当時、購入が不可能であった防具、竹刀をご寄贈頂くなど、ハンガリー剣道の基礎作りにはかけがえのないご支援をいただきました。

また、阿部先生は、「兵法家伝書」をハンガリー語に翻訳されたり、剣道の実技のみならず武道研究の普及にも尽くされていますが、最近では日本学専攻生の中に剣道をする学生も出てきて、MAの卒業論文に「免兵法之記」を教育法、教授

法の観点から分析する論文を出したり、武道研究の底辺が、少しずつではありますが、広まり始めたのではないかと感じております。

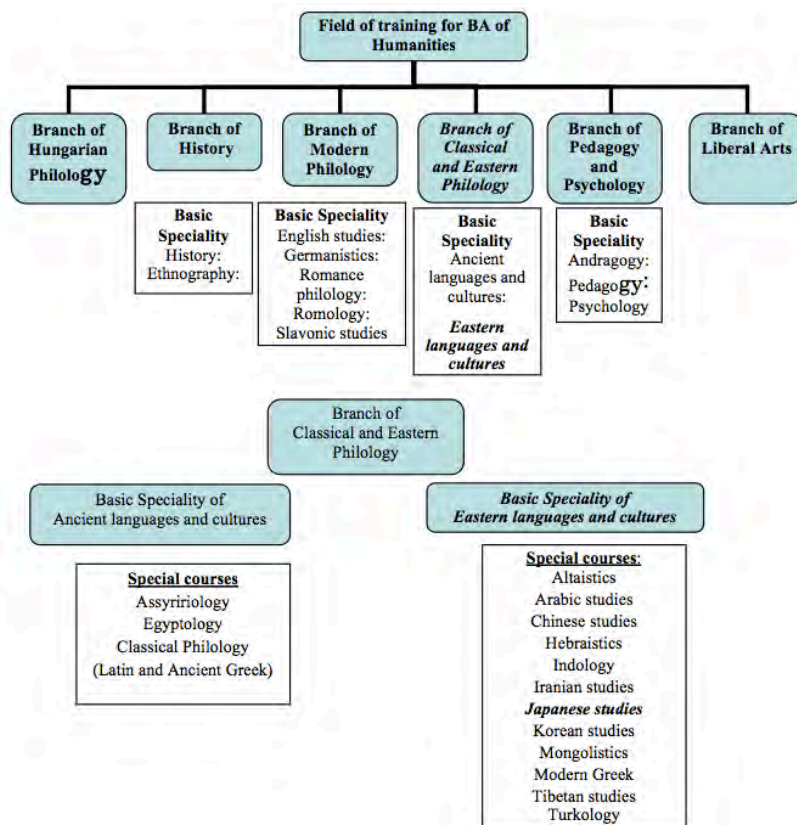
私の国際交流基金フェローシップへの応募の際に、推薦書を書いて頂きました先生方には、私の目指す「武道思想の研究」が従来の日本研究には見過ごされていた、特にも国際化を目指す今日の日本理解にとって、誠に重要なテーマであるとの評価のみならず私が実際に剣道をしていることも評価して頂き、当時の交流基金ではそのことも採用理由の一つになったようです。ここまで見えてきましたように、武士研究には精神的な研究においても常にそれに伴う実践面の研究が欠かせないことが分りますが、武士の精神的な研究が疎かにされてきた大きな理由として、実践的経験のない研究者には、その

意義と重要性に気づきにくいことが考えられ、正に、この点からしまして、武士研究にとって、剣道、柔道、柔術、馬術、弓道など何らかの伝統武道の実践の経験を持たれる研究者による研究が、例えば、能、歌舞伎、謡い、茶道、活け花等といった日本の伝統的芸道の他の分野の研究の場合と同じく如何に必要かつ大事であるかが分ると思われます。

以上、私のハンガリーでの経験を踏まえまして、日本史、特に中世・近世史の研究と外国からみでの正しい日本理解の養成と涵養にとっては武士の精神史的研究が大切であり、中でも武道研究を抜きにしては考えられないことを見えてきました。

II. ヨーロッパの学問体系に於ける「日本学」と「日本学」における「武道学」の意味と位置づけ

ELTE BA of Humanities and Japanese



次に、この武道研究が「なぜ日本学か」について見てみたいと思います。それには、まず「日本学」とは何かをクリヤーしなければなりません。ヨーロッパの学問体系では、イラン学、トルコ学、アラブ学、中国学などと同じく、日本学もいわゆる「文献学」の中に位置づけられます。⁽⁹⁾ このことは2006年にスタートしましたELTEのボロニヤシステムによる新制度のBA教育の専攻規定にも見られます(前頁)。

1. 「文献学」とは

さて、日本語の「文献学」はドイツ語の“Philologie”の訳で、久松潜一「国文学」によりますと、明治以後に上田萬年、上田敏によって名付けられた⁽¹⁰⁾ということですが、ヨーロッパの文献学の歴史を見ますと大きく「古典文献学」と「新文献学」の二つの発展段階に分類されます。

1.1 「古典文献学」

まず、「古典文献学」ですが、これには更に、次の三つの発展段階があります。

1) はBC 3世紀にエジプトのアレクサンドリア文庫を中心に発展した「アレクサンドリア的文献学」で、これはBC 9世紀に活躍したといわれるホメロスの原典の語句に付いての考証並びに注解の学で文法学が発展しました。⁽¹¹⁾

2) 次はヨーロッパ史の近世初期に当たるルネッサンス期(13世紀末葉～15世紀末葉)に興った文献学です。

これは古典古代の文化を研究する学問で、ギリシャ、ローマの古典文学と古典美術を通して、古典古代人

の思想と文化を研究し、これを自らの時代に再現しようとする人文主義的学問でした。

3) は、18-19世紀に発展したいわゆる「ドイツ文献学」で、これは、アレクサンドリア的文献学を包括し、ルネッサンス期の人間形成という教養思想を次第に希薄にしつつ、純粹に学問的研究を強化することによって18～19世紀にドイツで大規模な古典古代学として大成したものです。

大成者としては、ホメロス研究の古典学者Friedrich August WOLF (1759-1824) と、特に、ギリシャ学者Philipp August Böckh (1785-1867)があげられますが、中でも、A. Böckhは“Encyklopädie und Methodologie der Philologischen Wissenschaften.” (1886年)を刊行し⁽¹²⁾、近代文献学の学問的基礎を築きました。こうして、「文献学」は

「言語、文学、美術、科学、神話、伝説、宗教、制度、法律、経済、民俗など一切の領域を、それぞれの所産を手がかりとして解明し、これによって古典古代の生活と文化の全体像を描き出そうとする統一的文化科学」となりました⁽¹³⁾。

1.2 「新文献学」

次に「新文献学」ですが、これは、「ドイツ文献学」と同様の意図と方法と規模を持って、18～19世紀ヨーロッパの国民的自覚の下に興った各民族についての古代学としての文献学です。

ゲルマニステイカ(ゲルマン学)、イギリス学、ドイツ学、スラヴ学、

スカンディナヴィア学、ロマンス学、アラブ学、イラン学、等といったもので、中国学、日本学もここに位置づけられます。

以上から、繰り返しになりますが、現代の学問体系として「文献学」は次のように定義する事ができます。

「一民族乃至数民族の残したあらゆる分野の有形無形の文化的所産、特に言語的所産を資料として研究し、その成果を媒介として当該一族ないし数民族の、主として過去の生活と文化についての全体像を、創造的に再現しようとする統一的文化科学。」⁽¹⁴⁾

2. 日本の文献学

このドイツの文献学を日本に紹介したのはドイツに留学した上田萬年(1867-1937)と、特に芳賀矢一(1867-1927)で、彼等は西欧の近代文献学を移植して、江戸時代の契沖(1640-1701)、荷田春満(1669-1736)、賀茂真淵(1697-1769)、本居宣長(1730-1801)などの国学に新しい生命を吹き込もうとしたわけです。⁽¹⁵⁾

2.1 「日本学」と「武道学」

以上から「日本学」は文献学の定義を踏まえて、

「日本人の残したあらゆる分野の有形無形の文化的所産、特に言語的所産を中心資料として研究し、その成果を媒介として日本民族の過去および現在の生活と文化についての全体像を、創造的に再現または認識しようとする統一的文化科学」と定義することができます。⁽¹⁶⁾

そして、「武道学」は、この「日

本学」の定義からしまして、日本史上、重要な役割を果たしてきました武士によって培われ、現代に伝わる日本の伝統文化遺産の正しい理解と、それを次代へ伝える重要な課題を担う学問として、統一的文化科学としての「日本学」の重要な分野であり、また、武道の実践が格段に国際化されてきた今日、諸先生方の積み重ねてこられました多くの業績を背景に、正しい日本理解促進のためにも、武道学の更の開発促進は国の内外を問わず、当に、時代の要求ともいえると思います。

なお、最後になりましたが、空手、少林寺拳法などは、ここに言う、侍の文化から継承されてきた伝統武道とはいえませんが、近代武道として、特に空手は現代日本武道の国際的に最も知られた分野として、武道学の重要な研究分野と言えることを指摘させて頂き、話の終わりとさせて頂きます。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

質疑応答

司会(酒井)：先生、本当に有難う御座いました。我々は武道学の中だけで行っているものですから、日本学の中の武道というテーマでご講義頂きまして嬉しく思っております。

それでは質疑応答に移りたいと思います。挙手でお願いします。

長尾(明治大学)：山地先生、本日は貴重なご講演、有難う御座いました。昨年の大震災から一年経ちますが、その時は東北はもちろん、都会でも大混乱がありました。しかしそんな状況下におきましても、東北でのストイックな対応。都会でもバスターミナルや駅で整列する日本人の姿などを見て、私の教える留学生は

大きなカルチャーショックを受けたそうです。そういう日本人の姿に対して、武士道や武道文化等を関連性があるのかという事で、それを卒業論文のテーマにして取り組んでおります。先生は、ハンガリーで生活をされていますが、あの様な日本人の姿を見て、現地の方々は関心を示されていますか？



山地：これは世界的な反応であったと思いますが、あの震災時において日本の日本らしい面を見た、実感したという声はハンガリーでもありました。それは素晴らしい事ではありますが、同じ事が起きた場合、ハンガリーでもそのように出来るのかと言うと難しい問題であります。それは長い伝統で培われた日本の基礎であるように思えます。アメリカで災害が起こるとすぐに泥棒などの問題がでてきます。国の歴史や長い伝統によって育まれたものもありますし、背景が違います。日本で生まれ育った人間は、他の国に行っても当たり前のように思っていた事でも、残念ながら他の国で同じ事を求めるのは難しいのです。逆に言えば、こういう事が、日本が国際化していく上でも、絶対に忘れてはならず、外国の方に理解して頂き、伝えていく為にも、武道という手段が考えられま

す。

これはサムライ自身にも言える事です。江戸時代以降は、藩にそれぞれ学校が設立され教育が薦められました。その中には午前の座学、午後の実技がありこれらを両立させるためにも人格形成に力を入れたわけです。ただしその時に始まったのかと言えばそうではありません。サムライ自身もそれらは自覚しており、支配者という自覚が出てきた段階で、自分の息子らを教育するにはどの様にしたら良いのかと言う事になりました。

鎌倉時代の初めは、「サムライには学が無い」という事で平安貴族から卑下されていました。しかし、源頼朝は自らの努力で平安貴族の文化を吸収し、貴族化をしようとした平家とは一線を画し、武士の質素な厳しい生活を守り通したことが、鎌倉時代を繁栄させた要因ではないかと言われています。そのような長い歴史の中で培われたものが、昨年の震災に対する日本人の一般の行動に表れ証明したので、世界中を感動させたのではないかと思います。私自身は離れていたもので、そのような姿を見て涙が溢れて仕方なかったのです。

あの出来事は、日本という国を他国から正しく理解してもらう為の、良いきっかけにもなった訳です。我々自身もそういう事は感じる訳なので、可能な限り政府にそういう事に対し働きかけてもらいたいと思います。

先程、明治大学の長尾先生からお話しもあり、私も知っていましたが、明治大学とエトヴェシュ・ロラード大学は3年前から大学間交流協定をしております、今後、学科

間同士でも交流が可能ではないかと考えておりますので、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

湯浅（天理大学）：山地先生が筑波大にいらっしゃったのが、私が中林先生らの元で技官をしていた30数年前になります。その後、私自身は天理大学で、現在に至るまで奉職させて頂いております。今日は当時を大変懐かしく思い出しました。

私ども天理大学には体育学部がございまして、その中には専門コースである武道学コースがございます。ほどこの大学でもそうでしょうが、体育学部と言えば、欧州やアメリカから来たスポーツ科学、スポーツサイエンスが主な教育内容になっていると思います。その影響か、武道を専攻している学生達でさえも武道をスポーツとして考え、そのように捉える事が蔓延しております。学生らに対しては、本来の武道の良い面をどのように教えていけば良いのか考える一方で、諦めかけていることも正直なところです。

本日、先生から長年ハンガリーで苦勞されて、武道が日本学としての重要な位置を占めるということを切実に説かれた成果が、ハンガリーの方々あるいは広くヨーロッパの方々に理解されるようになったことを知り、私自身も今一度初心に帰って学生たちと対面してゆきたいと考えま



した。お礼の言葉を述べたいと思います。有難う御座いました。

山地：私もハンガリーで剣道を教えてきましても、ハンガリー人が30歳ぐらいで昇段していくと「勝てばいい」と、剣道をスポーツ的に考える様になったり致します。しかし、私は彼らに、「40代、50代になり筋力が衰えていくとそういう考えではやっていけませんよ。あなたがやっているのは武道じゃないからです。ところが、日本の剣道の先生方をご覧下さい。年齢が上がれば上がるほど、その方には触る事も出来ないくらいの境地に達します。これは何故か？そこをしっかりと考えて行かなければ剣道をやる意味がないよ」と話しています。最近、ようやくその重要性に気付いて自ら説く外国人剣道家の方が出てきました。

日本でも剣道がスポーツ、勝負事になっている面もあります。それも一つの考え方かもしれませんし、試合結果は、練習や稽古の成果という面もあります。しかし、武道は100m競争や砲丸投げなど、身体能力だけでは説明できないものが多々あります。そういう意味での、日本の武道教育において、昔の先生方がどうしてそういう境地に到達されたのかということ、スポーツサイエンス的にも調べてみる姿勢は大切だと思います。

武道の力を究明せずに、現在あるスポーツサイエンスのみで色々断定するのは間違っていると思います。それをきちんと究明しないまま、「こうすれば武道が強くなる」という成果を示すことは、武道の場合は意味が逆転していると思います。

木原（鳴門教育大）：武士の大きな特徴として切腹があります。物事のけじめや争い事のけじめとして武士として背負っていたと思います。山地先生は武士の切腹について、日本学の観点から見てどう位置づけられていますか。



山地：切腹、ハラキリの話はよく質問されます。切腹は最終手段ではありませんね。大切な事はそういう事ができる経緯、背景ですよ。ソクラテスが生まれたギリシアは民主主義で、デモクラシーを説いてきたのですが、ある時、デモクラシーにこじつけて選挙で駄目にさせた事があるのです。彼の立場からすれば自分が言い負かせば、投票を行う必要はなかったのですが、デモクラシーだからと言う理由で投票を行い、死刑判決を潔く受けました。切腹は日本独自のものではなく、世界でも、ある境地に達していれば出来る人がいる。武士の場合は、ハラキリという派手な方法なので、外国から見るとすごいということなのですが、実はこれは武士が始めた事ではなく「古事記」にも出てきますが、ある神話

の中で男子ではなく、女神が切腹したことが出てくるのです。

武士の場合は、めったやたらに切腹するのではなく、「そういう状況が来た場合は切腹する覚悟がある」という精神性を作り上げたところに意味があるのかと思います。東條英機は切腹ではなくピストルで自害した。乃木希典はなぜ切腹したのか、森鷗外が書いていますが、自分の為に多くの兵隊が亡くなった。これをつぐなえるのはこの方法しかない。それは武士として最期を迎える日本の伝統的な方法だと。そういう歴史的経緯などをきちんと説明すると、ヨーロッパの人達も理解するようです。ヨーロッパではサムライは切腹である、など表面的理解が先行しがちですが、そうではなく、精神的な問題を説けば誤解は解けると思っています。

西丸：私自身は、空手を少しかじっていましたが、武道を勉強したいと思いました。日本刀の研究をしている酒井先生の本を読んだり、武士の精神世界を勉強しています。東京の笹塚にございます刀剣博物館にて、平安時代から歴史的な日本刀がずらりと並んでいるのを見た時に、空手や少林寺拳法は現代武道だと言われるのですが、そういうのは護身術として使うものですが、日本刀では護

身術というのは考えられず本当に人を傷つけてしまいます。そういうものを実学として教える場合は、やはり武士の世界というものは、最後は人を殺すことに行きつくのか、ご意見をお伺いしたいです。

山地：勝海舟は、直心影流をマスターして免許皆伝だったようですが、人を斬るのはもう嫌だから鑊をこよりで巻いて刀を抜けないようにしようとしたそうです。一生刀を抜かなかった。直心影の技を全て使う事はできたんですよ。刀で相手を斬らずに抑え込んだ。本当の剣術の達人は皆そこまでいっているようですね。それが本当の刀の意味だと思います。古代から三種の神器の一つ、刀は精神性を持った象徴です。徳川家康は自分の息子らにわざわざ当代一といわれた柳生宗矩を採用して、剣術を勉強させた。すでに鉄砲や砲術の威力を自覚していたが、なぜ学ばせたか。その辺りを調べると、剣術の本当の意味が分かると思います。剣を持った事がない人が、実際の刀を持つと怖いと感じますが、刀に関する古来からの見方は人を切るなんていう気持ちは持っていない。しかし欧州では、歴史の背景から武器＝相手を倒すという発想ですが、日本の場合は何故刀をこういう形に発展させてきたかという問題を研究すれば、護身術としてもわかってゆくと思います。

杉江（日本武道学会副会長、剣道分科会顧問）：お話を伺って大切なところは、精神的なものを伴う実践的な側面の究明だと思います。武士には「言行一致」や「知行合一」といったことが大事で、むしろ実践が

優れていれば評価をした時代だったと思います。大阪大学文学部に日本学という講座がありました。そこを指導されていた湯浅泰雄先生が『身体』という本の中で、日本のように身体的実践であるとか、体を使って何かをすることを大事にしたり、評価をしたりするという文化は、世界的にみると非常に稀である、とおっしゃっている。儒教の文化では「崇文軽武」（すうぶんけいぶ）といって、文は尊く武は軽い、頭が良くない者は体を使って仕事をする、といった考えがある。司馬遼太郎さんは実践や行為・行動を非常に大切にする民族としては、アングロサクソンであるイギリス人がそうであると著書の中でもおっしゃっていました。岸野雄三先生は、ラグビーフットボールは近代における騎士道精神の復活であるとおっしゃっていました。7つの海を支配してきた英国人自身が、実践の伴わない学問だけの人間は2、3人だけでいい。イギリス人にとって大切なのは、行動力を持った二三百人の人たちから尊敬されるキャプテン（船長）が欲しいのだという事を聞いた事があります。そういう意味では、司馬遼太郎さんが、英国民族と日本民族は、スポーツと武道において、行為と行動、実践を大事にする。これが上流階層のリーダーシップだと、騎士と武士がですね。イタリアやフランスのような先進国家では、官僚統制、シビリアンコントロールというものが強い土地であります。山地先生のお話と重複しますが、野蛮な武士が文的素養を身につけながら官僚化していく、しかしながら徳川氏は、武的内容を重視する鎌倉的な武士の生き方を良しとして、室町の貴族化した武





士から離れて江戸に幕府を開いた。司馬遼太郎さんの言葉で感銘を受けたのは、薩摩の武士と騎士道精神を持ったイギリス人の軍人の戦いが薩英戦争であり、その薩英戦争はお互いの敢闘精神を称え合ったノーサイドであった。そのことによって英国は江戸幕府ではなく薩摩藩に信をおいた、とっています。武道や武士道を考える上で、武的な修練、スポーツと武道を大事にした日本人とイギリス人といった司馬遼太郎さんの意見に私は感銘を受けたので、この場を借りてお話しさせて頂きました。

山地：先輩である司馬遼太郎さんの話が出ました。彼は若い時にモンゴル語を勉強した理由は、ゴビ砂漠で戦車隊長になりたいからという話がよく言われていました。さきほどの司馬遼太郎さんの話は知りませんでしたが、分かるような気がします。アーサー王の「円卓の騎士 (Knights of the Round Table)」には剣を神秘化して描いております。イギリス人の根底には、騎士道に由来する正しいものに対して最後まで戦うという精神が現代まで続いていると思います。そういうのを知ると日本独自のものではないということ。その表現の仕方が様々であるということ。表現の違いのみで「日本独特だ」と言わず、そう

いう知識や理解を深める事が大切ですね。私自身もそうありたいと思います。

司会：若い方から質問ありますか。

軽米 (筑波大大学院)：私は昨年の夏に、ハンガリーに行かせて頂き、その時にトート君という学生にお会いしました。彼は現在、国士舘大に留学しているようですが、彼から「日本文化として剣道を学びたい」という話を聞いて非常にショックを受けました。僕達のような日本の大学生は、剣道を競技として捉えている人間が多いと思います。平成24年度から、中学でも武道が必修化となり、日本の伝統文化の一つとして剣道を学校教育の中で教えてゆかなければなりません。武道というのは精神と技術で一つだと思いますが、教えるとなった場合はどうしても技術のみに走りがちです。ハンガリーで剣道指導をされる場合、技術を教えることを通して、いかに剣道の文化を教える工夫をされていますか？



山地：今日は時間の関係で、その話が出来ませんでした。「実技そのものが文化である」と思います。『月刊武道』(日本武道館発行)で読んだのですが、かつて小森園先生がで「剣道は文化である」、とイギリスまで行って教えたそうで、その記事を読み大変感銘を受けました。その

小森園先生のことをまとめた本を読むと、なぜ剣道は文化であるとおっしゃったのか理由が分かりました。

ハンガリーで剣道を教え始めて最初に経験した事は、偶然知り合ったハンガリー人で空手の先生がおりました。その方は私が剣道をしてる事を知り、是非教えてくれと言われてました。最初とにかく足遣いがまったく出来ないのです。その空手の先生の沾券に関わったようで、その空手家は「ハンガリーではハンガリーの足の遣い方がある」と言い出して受け入れません。仕方なく私は「私と試合をして私が負けたら、私はあなたの弟子になる」といって試合を持ちかけました。試合が始まりました。彼は竹刀を鷲掴みにして、竹刀を片手に振り上げてきました。そうすると彼の喉元はガラ空きですから、私はそこに竹刀をすっと伸ばしたら見事に突に入り、ズデーンとひっくり返ったのです。その後、彼は従ってくれました。当時はそのような方がたくさんいたのです。(会場から笑い)

また、「手の内」というのは、ハンガリー語で説明の方法がありません。実際に稽古してみないと分かりません。私が教えたハンガリーの剣道六段も、竹刀の持ち方は直りません。ヨーロッパの人々は基本を教わらずに昇段していつてしまう。足遣いにしても同様です。それはアメリカ式のスポーツサイエンスでは、なかなか教えられないのです。居合の試し切りもそうだと感じています。刀の持ち方がきちんとしていれば、力を入れずにスッと斬れます。そういう事はスポーツサイエンスでは難しいですね。それをどう分かってもらうか理解してもらうか、武道が国

際化する場合の、武道学の任務だと思います。

大石（八洲学園大学）：先生は現在ハンガリーにおいて武士の精神性を教えてこられ、ハンガリーの皆さんが学んでいる。ハンガリーの人たちは、最初は自分たちの国の文化になんか知らないものを知り驚嘆しながら学んで行くと思います。しかし、その驚嘆を突きぬけて日本的な精神性にある程度理解・共感を得た場合、彼ら自身の内面性の変容、精神性はどうかということに興味があります。ハンガリーの独自のものを否定していくようになるのか、それとも融合して新たな世界観を広げるのか、ハンガリー人の内面性の変化で感じられたことを教えて頂きたいです。



山地：ハンガリーでは最初、津島大使と一緒に居合と剣道を教えました。さきほど、国土館大学に来ているトート君の話が出ました。彼は田舎の街の出身で子どもの頃から知っています。彼らは異文化との接触を期待している部分もあります。私はハンガリーで日本学の学生に、日本的な考え方とハンガリーの考え方を私自身が経験してきましたことを通して、日本的な考え方を紹介してあげる。剣道であってもその通りやれ、ではなくて、こういう別の見方もあるよということをお伝えしました。

ブツダがそうだった。同じ質問でもAの人とBの人では言い方が違い、全く真逆のようなことを話されたそうです。それを傍で聞いたお弟子さんが理由を説いたところ、人間はそれぞれ生きてきた過去がある。それぞれの経験が違うのでその人に合ったことを言わなくては行けないと答えたそうです。教育はまさにそうですね。押しつけるのではなく、最終的には全く違うような事を言っても、最終的に本人が考えて答えは見つけていけると思います。そのために議論もしますし、一緒に考えていく必要があると思います。それが型にはまらないという、真の教育であると思っています。

村田（日本武道学会理事長、講道館）

：私自身もずっと柔道の世界で生きてきた人間であります。自分の内面にあるものを開放して、率直自由にモノを言うような社会ではない。それが現代日本の武道社会だと思います。西洋の武道界で自由にモノが言えますか？どのような状況になっているかお聞かせください。



山地：今のモノを言えない現状は、日本の歴史を振り返ってもそうだと思います。しかし侍のすごいところはここにあったと私は考えています。すなわち、侍と主人の主従関係においても、本当の家臣と言うのは

主人のやり方などをずっと傍で見てきて、「これではお家のためにならない」という状況にいきついたところでは、自分の体を張ってでも責め言葉を強くぶつけて進言しました。主人が賢ければその進言は理解してくれるだろうと考えての行動でした。いま就いている主人が主従関係を結ぶに足らないものだと知ったら、自らほかの主人に平気で移籍していったわけです。

同じ事はハンガリーにもあります。ハンガリーの社会では、体を張って世の中を良くするために言おうという人が減ってきています。ただし国の体制が変換した時には、それが無血でうまく出来たのです。実際に私は肌で感じています。しかしこの20年くらいでまたそういう風潮がなくなってきたのも現実です。本当にそういう変化が必要な状態になれば、中から変化は起こるようになります。戦国のように武将に進言できるようになれば武道会も活性化されると思います。全剣連自体もそういう時期に来ているのではないかと思います。

司会：まだまだ質問は尽きないと思いますが、名残惜しいですが、質問はここで締め切らせて頂きます。最後に津島大使にお話し頂きたいと思っています。

津島（元ハンガリー日本大使館文化担当一等書記官、前ルーマニア駐節特命全権大使）

：私は2001年～2003年くらいまではブラジルで総領事をし、その後アフリカのモザンビークで大使、最後にルーマニアで大使を致しました。実はルーマニアは4回目の滞勤でしたが、3回目の前

にハンガリーに4年いて山地さんと剣道もしました。一番最初にルーマニアに行ったのが1965年でした。行く先々で共産主義も経験しました。最初はブラジルで、その後のモザンビークでも剣道をやっていましたし、そういう経験を評価頂いて、全剣連で国際委員会に名を連ねております。今日は大変興味深く話を聞かせて頂きました。我々日本は明治維新後、ハードウェアは西欧化しましたが、ソフト面つまり精神面はなかなか変わらずここまで来ました。今求められていく事はソフトウエアの変換だと思えます。その時には、すべて西欧化するのではなく武道や日本文化も含めてどう変えていくのか若い人たちに頑張ってもらいたいと思えます。今日は有難う御座いました。



司会：先程、津島大使にご紹介いただいた、社会主義体制下において剣道をやる事についてのお話も大変インパクトがある話だと思います。この後の懇親会にもご参加下さいますので、是非皆さまお聞きください。ではこの分科会副会長の大保木先生からお話をお願いします。

大保木（剣道分科会副会長、埼玉大学）：本日は異会長の代わりに御礼を申し上げます。

私は、筑波大学の研究室で恩師の



中林先生を介して山地先生にお会いして以来30数年経ちます。お話をお聞きしながら色々な思いがこみ上げております。いま思い起こしますと、中林先生は「武道と言うものは本当に大変な内容を持っている。凄いモノをもっているんだけど、これからはその中身をどうするかっていうことが大事だよな・・・。」と心に秘めておられました。ある意味では、中林先生は‘かた問題’についてもずっとおっしゃっておられたのですが、志半ばにして早く亡くなられました。その言葉を胸に、それぞれが様々な形で引き継いで30数年経った訳であります。それを介在されたのが、高橋進先生でありました。高橋先生は思想史といえますか、武道における理想を書いた著書があるのですが、それがまさに頭に浮かんで参りました。

はたして武道というものが、このグローバルな世界でどのような意味を持ち、たかだか日本列島の中で殺し合いをしてきた小さな文化が、モノが言えるのか言えないのか、その文化は2度にわたり、抑圧や弾圧をされた。その中で、現在武道は、スポーツというジャンルで生き延びていますが、中林先生がおっしゃるには「そうではないんだよな」と言っていた。とはいえ偏狭なナショナリズムになってはいけないし、ナショ

ナリティを売ったからと言ってそれがグローバルになる訳でもないと訴えていたことなど、ずっとそういう問題を抱えながら皆が研究を続けている所であると思えます。

そういう意味で、山地先生がわざわざ遠くからお越し頂き、本会でご講演頂いた内容はそういう問題に、一つの風穴を開けて下さったと思えます。文献学の可能性とその限界はあると思えます。日本の中でも1980年以降、例えば源了圓先生が、かた（型）問題自体を問題にし、日本の実学をどうすべきかと言う事で実践知と理論知を分けて考えるべきだと提唱され論文を発表されましたが、それ以降はそれを具体的に実現したり、海外に広めるために実際に行っている我々ですら、体験的に「これだ」ということはあったとしても、ある種の言葉で表現することは大変難しい作業であると思えます。

しかしながら、山地先生の本日の講演内容をお伺いし、私を含めてここにいる我々武道に携わる人たちに、武道の問題を今後どのような方向に行けばいいかという事をご示唆頂き、本当に感謝申し上げます。

昨年来、日本固有の文化として様々なテーマを取り上げましたけれども、固有性の文化は普遍性であって欲しいという願いもあります。次回はこのテーマに関して、山地先生にもご見解をお伺いしたいと思います。今後とも深いご縁になるよう我々一同願っております。本日は誠に有難う御座いました。

司会：最後に武道学会会長の百鬼先生にご挨拶頂きたいと思えます。

百鬼（日本武道学会会長、東京農工大学）

：本日のお話に変感銘を受けました。日本武道学会としても今年9月に国際シンポジウムを行います。グローバル化、武道の統制、精神性等含めまして再度見直しが必要なのではという観点ですが、今後とも続いていくので是非とも先生にもご協力をお願い致します。

現代の日本の社会は、戦後教育のひずみを矯正しようという考えがあります。それは教育基本法を改正したことにもあります。このままの日本、日本人が良いのかという見直しの風潮があります。さらに初等教育、中等教育だけでなく、高等教育にまで及んでいます。今は大学内では必ず「グローバル人材」という言葉が出てきますが、グローバル人材＝語学が出来るという事ではありません。やはり①世界でリーダーシップを取って行く指導力②克己心などの人間性的内容 ③異文化を理解し日本人としてのアイデンティティを有する者が求められている。その三本柱を持った人間が「グローバル人材」と言われます。そういう人材が大学あるいは大学院の中でも求められている。そういう三本柱を持つということが「イノベーション」とされている。それは単なる技術革新ではなく、意識改革ということです。現代は日本人全体が教育に期待している実態がありますが、その時に皆さんが理解しつつ、それは武道で実現できる、と短絡的に言えるかどうかは問題です。武道自体色々な問題を孕んでいる訳です。

ただし我々は、そんな中において武道とは何なのかと、常に問いかける必要があります。

先程、山地先生もお話しして下さ

いましたが、同じ物にも様々な見方があり客観性を問われます。一方的に見て判断するものではありません。強いて言えば、それが科学と言う事になります。そのようなマインドを学生のうちから持つ事が大切です。

武道を知らない方に対してどのように語りかけ、理解してもらうのかという事を考える事が大切です。知らない人からは武道は変わり者などと言われる事もありますが、やはりそういう方達に理解頂くには基本は“学”です。プレッシャーを与える訳ではありませんが、若い学生の諸君は、そういう事を見据えて学んで欲しいと思います。脱線したようで申し訳ありません。

本日は、私も含め皆さんが刺激を受けました。有難う御座いました。

（拍手）

司会：山地先生、今回をご縁に今後とも末長くご指導願います。本日は誠に有難う御座いました。



(1) ELTE 日本学教育の内容を知る参考資料としまして、以下に添付のカリキュラムは1996/97年度の日本語教員養成プログラムスタート時に若干改編された旧制度の5年制MAのカリキュラムですが、基本的には1986/87年度の日本学専攻スタート時のものと同じ内容です。その後、2006/7年度からのボロニャ制度導入による3年制BA + 2年制MAへの移行で、大幅に改編され、現在、日本学教育はPhD 3年を併せて3+2+3年制の教育システムとなっています。

旧制 (科目履修制、履修期限5年、MA)

Subject	Activity	Classes per week
<u>Introductory and basic studies (27 activities, 50 hours)</u>		
Modern Japanese language practice I-IV.	practice	2 (8 in total)
Modern Japanese text reading I-IV.	practice	2 (8 in total)
Life in Japan today I-II.	lecture	1 (2 in total)
Modern Japanese grammar I-II.	practice	2 (4 in total)
Classical Japanese grammar I-II.	practice	2 (4 in total)
Introduction to the history of Japanese literature I-II.	lecture	2 (4 in total)
Japanese literary text I-II.	practice	2 (4 in total)
Introduction to the history of Japan I-II.	lecture	2 (4 in total)
Introduction to the Japanese history of thought I-II.	lecture	2 (4 in total)
Introduction to Japanese philology I-II.	lecture	2 (4 in total)
Basic Japanology seminar I-II.	practice	2 (4 in total)
University exam I.	exam	0
<u>Specialised studies (25 activities, 38 hours)</u>		
Japanese conversation and translation practice I-IV.	practice	2 (8 in total)
Reading special texts I-II.	practice	2 (4 in total)
Classical Japanese texts I-II.	practice	2 (4 in total)
Kanbun I-IV.	practice	2 (8 in total)
Special lectures I-VIII.	lecture	1 (8 in total)
Special seminar I-II.	practice	2 (4 in total)
Thesis seminar I-II.	practice	2 (4 in total)
University exam II.	exam	0
Thesis	diploma	0
Final closing exam	exam	0

Degree in liberal arts (M.A.) 54 units.

Units for teacher's qualification

Applied linguistics of Japanese language I-II. (equivalent to two special lectures of linguistics)	lecture	1 (2 in total)
Learning motivation in Japanese language hours (equivalent to Special lecture VII.)	lecture	1
Seminar for Japanese didactics	practice	1

Degree in teacher training (M.A.) 55 units

(2) Kőrösi Csoma 東洋学会 企画

東洋語学シリーズ

「Japán 1-4. (日本語教科書 1-4.)」1986-89年

(「Japán Nyelv 増補改訂版 日本語教科書」教科書出版、ブダペスト、1990年)

東アジア歴史シリーズ

「Japán történelem 日本歴史」1985年

(「Japán – Történelem és hagyományok 増補改訂版 日本—歴史と伝統」Gondolat、1989年)

(3) Studies on *Bushi* (*Samurai*)[Acta Asiatica 49. (1985年)]

BITŐ Masahide (尾藤正英): Foreword

ISHII Susumu (石井進): The formation of *bushi* bands (*bushidan* 武士団)

YOSHIE Akio (義江彰夫): The Kamakura 鎌倉 *bakufu* as a legitimate public authority

NAGAHARA Keiji (永原慶二): The lord-vassal system and public authority (*kōgi* 公儀): The case of the

Sengoku daimyō 戦国大名

TAKAGI Shōsaku (高木昭作): “Hideyoshi’s 秀吉 peace” and the transformation of the *bushi* class: The dissolution of the autonomy of the medieval *bushi*

BITŐ Masahide (尾藤正英): *Bushi and the Meiji* 明治 Restoration

(尚、尾藤先生には1988年の春学期に国際交流基金の助成で、日本専攻の客員教授としてELTEにお越し頂く機会を得まして、この問題についても直接に先生とお話する機会を得ましたが、改めて問題提起の間違っていいことを確信できました。)

(4) 「文」と「武」の言葉は律令制の成立によって「文官」「武官」の形で日本語の中に定着するものですが、武士に関して「文武」としてこの言葉が出てくるのは「平家物語」が最も早いようです。

尚、『古事記』の場合、「文」は、太安万侶の序文中に、「文質不同」とあり、また、応神天皇の和邇吉師貢進のくだりに「...千字文一卷...」即貢進。此和邇吉師者文首等祖。」の二か所に使われているだけで、一方、「武」は一度も使用されておらず、「勇者」を意味するタケルの名前も『日本書紀』での「日本武尊」「熊襲梟帥」に対して共に「建」の文字で「倭建命」「熊襲建」と書かれています。此のことは、編者の文字使用の態度と、中国的「武」観が学ばれる以前の日本人の、闘いと武勇に対する考え方の反映ではないかと思われ、また、「歌」の文字があっても、文章や学問を意味する「文」が出てこないのも、『古事記』が安万侶の序文にありますように、稗田阿礼が読み習わした帝皇日継と先代旧辞を撰録したものであることと、大学寮が制定される以前の、文字文化がまだ興隆普及していない推古朝までの事績の記載であることの反映として、当然のことかもしれません。参照：山地征典「文」と「武」— 武士の思想研究によせて — in: „Sünden des Worts Festschrift für Roland Schneider zum 65. Geburtstag”, ed. J. Arokay, Klaus Vollmer. MOAG 141, Hamburg 2004. 467-490.

- (5) 1991年－1992年 国際交流基金フェローシップ
 ー「日本的思考－武道思想－及び古流の研究」
 この年のフェローシップ採用テーマ221件の中、
 ・直接に武士思想を扱うものは筆者の本プロジェクト1件
 ・間接的に武士思想にも触れると思われるもの
 儒教関係 2
 佛教と宗教に関するもの 3
 戦国大名の法制度 1
 (The Japan Foundation Fellows 1991-1992. Tokyo, 1991)
 ー筑波大学にて武道学研究と剣道並びに 鹿島神流の稽古
- (6) - *Sugjó – Test és lélek edzése* [修行－身体と心の鍛錬] =
 KELETKUTATÁS. 1993. 156-167
 - *Isszai Csodzan: A macska fantasztikus tudománya – avagy a
 szamurájok gondolatvilága* [佚斎樗山、“猫の妙術”すなわちサムライ
 の思考世界] = KELETKUTATÁS 1994. 71-83. etc.
- (7) ハンガリー剣道
 1982年 開始
 1985年 ハンガリー剣道連盟創設
 1986年度から2年ごとに国際交流基金の助成により全剣連剣道使節団を迎える。1996年まで
 1992年－2006年 JOCV剣道隊員派遣
 1992年夏JOCV青木盛久事務局長の支援で実現、第一次剣道隊員として阿部哲史隊員を迎える。
- (8) 3月にお話しさせていただきました後、5月にイタリアのノヴァラで開催されました世界大会で、ハンガリー剣道は
 男子チームが3位を獲得する活躍を見せてくれました。
- (9) 「文献学」と「日本学」についての項は、脚注1のところで紹介しましたカリキュラムの中に見られます、昨年まで
 山地の担当しましたIntroduction to Japanese philology I-II. (BAでは半期の講義)の講義録に基づいて紹介させていただきました。
- (10) 久松潜一「国文学」、東京大学出版会、1959年。15 p。
- (11) ・アレクサンドリア：前332年アレクサンダー大王が建設。古代エジプトの首都。ヘレニズム文化
 と地中海貿易の中心地。
 ・アレクサンドリア文庫：プトレマイオス2世（前308－前248）が創設した古代最大の図書館、50～70万巻の書を
 蔵したという。前48年シーザーとポンペイウスとの戦いで焼失。
- (12) *Enzyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, Leipzig: Teubner, 1877 (2. Aufl. 1886)
- (13) 吉田精一編「日本文学概説」、有精堂、1976年。45p
- (14) この文献学の定義から、日本の「国学」、中国の「訓詁学」、「考証学」と言われているものも文献学にとらえる
 ことができ、また、前4世紀頃のインドの文法家で、インド最古の宗教文献であるVeda研究の補助学として生まれた文
 法学の体系を確立、サンスクリットの文法を整頓し、八編からなる世界最古の文典を作成した、Pāṇiniの仕事も文献学
 の範疇に入れることができます。なお、Pāṇiniの文典は現代言語学の祖、ソシュールにも多大の影響を与えたと言われ
 ています。
- (15) 前掲、久松潜一「国文学」及び吉田精一編「日本文学概説」の文献学的研究法に関する項、参照。
 ・芳賀矢一、1900－1902年（明治33－35年）文学史研究法のためにドイツ留学。1902年8月にドイツから帰国後、9月か
 ら東京帝国大学文科大学教授。国語学国文学第二講座担任。1922年3月退官まで、日本詩歌学、国文学史、文学概論
 の他、日本文学史その他の講義を毎年行う。（国文学史十講 etc.）「落合直文、上田萬年、芳賀矢一、藤岡作太郎
 集、明治文学全集44」年表参照。
 ・上田萬年、1890－1894年（明治23－27年）言語学研究のためにヨーロッパ、主としてドイツ留学。1894年6月帰国。7
 月帝国大学教授。1898年東京帝国大学文科大学教授兼任、芳賀矢一と博言学講座分担、12月国語研究室創設と共
 に、その主任となる。（P音考、国語学史 etc.）「落合直文、上田萬年、芳賀矢一、藤岡作太郎 集、明治文学全集
 44」年表参照。
- (16) 本来ならば、ここで、文献学の方法論を紹介して、「日本学としての武道研究」の方法論についても触れるべきで
 すが、今回は、題目の趣旨からしまして、「日本学としての武道」の定義までとし、方法論については、次の機会を
 待つこととしまして、脚注ではありますが、それには基本的に「形態的研究と内容的研究」の二面があることを指摘
 するだけにとどめさせていただきます。

平成22年度 剣道専門分科会 事業報告

1) 総会の開催

平成22年9月3日(金)：明治大学和泉キャンパス 体育館1階 剣道場

審議事項：平成21年度事業報告(案)、平成21年度会計報告(案)、平成22年度事業計画(案)、平成22年度会計予算(案)を承認した。

2) 第43回大会における分科会企画フォーラムの開催

日時：平成22年9月3日(金) 14:00~16:00

場所：明治大学和泉キャンパス 体育館1階 剣道場

テーマ：「中学校武道必修化を迎え、改めて武道の礼法を学ぶ—小笠原清忠先生をお招きして—」

講演者 小笠原清忠氏(弓馬術礼法小笠原教場31世宗家)

司会 酒井利信氏(筑波大学) 前阪茂樹氏(鹿屋体育大学)

3) 研究会の開催

22年度研究会は震災の影響で延期となり、下記の日程で実施された。

日時：平成23年5月28日：明治大学和泉キャンパス)

テーマ：「武道(剣道)研究の国際的交流の可能性について—韓国およびポーランドにおける武道研究の現況を踏まえて」

講演者：百鬼史訓氏(東京農工大学教授、日本武道学会会長)

4) 幹事会の開催

5) 書籍の刊行『剣道を知る事典』東京堂出版 第3版 平成22年10月

6) 会報『ESPRIT 第8号』平成22年9月発行

7) ホームページ「KENDO ARCHIVES」の運営

8) 会費の徴収

平成22年度会費2,000円を徴収した。

以上

平成23年度事業計画（案）

1) 総会の開催

平成23年9月1日（木）：国際武道大学

審議事項：平成22年度事業報告（案）、平成22年度会計報告（案）、平成23年度事業計画（案）、平成23年度会計予算（案）。

2) 第44回大会における分科会企画フォーラムの開催

テーマ：

「剣道の固有性を考えるー海外における剣道学習者が、剣道に求めるもの（長期滞在指導の経験を通して）ー」

日時：平成23年9月1日（木） 14時～15時40分

場所：国際武道大学

パネリスト 塩入 宏 行氏（埼玉大学名誉教授）、本多 壮太郎氏（福岡教育大学）

司 会 田中 守氏（国際武道大学）、太田 順康氏（大阪教育大学）

3) 研究会の開催

テーマ：「日本学としての武道」

日時：平成24年3月17日（土）16：00～18：00

場所：講道館 2階教室

パネリスト 山地征典氏（ハンガリー・エトバシュロランド大学）

司 会 酒井利信氏（筑波大学）

4) 幹事会の開催

5) 書籍の刊行

『剣道を知る事典』東京堂出版 第3版

6) 会報第9号『ESPRIT 2010年度版』（平成23年8月発行）

7) ホームページ「KENDO ARCHIVES」の運営

- ・会報『ESPRIT』を掲載。
- ・ホームページのリニューアル。

8) 会費の徴収

平成23年度会費2,000円の徴収

以上

平成22年度 剣道専門分科会 一般会計決算書(案) (平成22年4月1日～平成23年3月31日)

1.収入の部

科 目	予算額	決算額	差異	摘 要
1 前年度繰越金	200,161	200,161	0	平成21年度からの繰越金
2 会員会費	200,000	212,000	△ 12,000	会費2,000円×106口(22年度分73口、過年度分33口)
3 本部助成金	50,000	50,000	0	学会本部より助成金(分科会への定額補助50,000円)
4 広告収入	23,000	24,000	△ 1,000	分科会HP,「剣道時代」パナー広告(21年度分)
5 寄付金収入	0	0	0	
6 利息	0	81	△ 81	分科会口座預金利息(4月1日、10月1日)
当期収入合計	473,161	486,242	△ 13,081	

(単位/円)

2.支出の部



科 目	予算額	決算額	差異	摘 要
1 研究助成費	120,000	120,000	0	43回大会分科会企画、研究会、講師謝礼
2 広報活動費	50,000	0	50,000	
3 印刷・消耗品費	60,000	70,034	△ 10,034	会報印刷代・事務用品等
4 通信費	35,000	46,390	△ 11,390	郵送料、切手・はがき代等
5 会議費	15,000	17,799	△ 2,799	幹事会会議費
6 交通費	100,000	22,700	77,300	役員交通費・講師交通費
7 傭人費	50,000	36,600	13,400	事務局アルバイト
8 予備費	43,161	0	43,161	
9 次年度繰越金	0	172,719	△ 172,719	平成23年度への繰越金
当期支出合計	473,161	486,242	△ 13,081	

(単位/円)

監査の結果、適正であることを証明いたします。

平成23年 6月 30日

日本武道学会剣道専門分科会監事

八木沢 誠 
 武藤 健一郎 

平成23年度 剣道専門分科会 一般会計予算書(案) (平成23年4月1日～平成24年3月31日)

1.収入の部

科 目	予算額	前年度予算額	差異	摘 要
1. 前年度繰越金	172,719	200,161	△ 27,442	平成22年度からの繰越金
2. 会員会費	220,000	200,000	20,000	2,000円×110口
3. 本部助成金	50,000	50,000	0	学会本部より助成金
4. 広告収入	24,000	23,000	1,000	ホームページ、バナー広告 2,000円/月
当期収入合計	466,719	473,161	△ 6,442	

(単位/円)

2.支出の部

科 目	予算額	前年度予算額	差異	摘 要
1 研究助成費	120,000	120,000	0	第44回大会分科会企画、及び研究会の助成金
2 広報活動費	30,000	50,000	△ 20,000	恒常的広報活動への助成
3 印刷・消耗品費	70,000	60,000	10,000	会報印刷代、事務用品等
4 通信費	50,000	35,000	15,000	郵送料、切手・はがき代等
5 会議費	20,000	15,000	5,000	幹事会等会議費
6 交通費	100,000	100,000	0	幹事会等交通費
7 備人費	50,000	50,000	0	事務局および広報活動におけるアルバイト
8 予備費	26,719	43,161	△ 16,442	
当期支出合計	466,719	473,161	△ 6,442	

(単位/円)

平成22年度 特別会計決算(案)

1.収入の部			
科 目	予算額	決算	摘 要
1)前年度繰越金	790800	790800	
2)『剣道を知る事典』3版印税収	225,000	225,000	印税総額(定価2,500円×1,000部=2,500,000円)×0.1=250,000円 差引支払額 250,000円—源泉徴収税額25,000円=225,000円
当期収入合計	1,015,800	1,015,800	(単位/円)
2.支出の部			
科 目	予算額	決算	摘 要
1)研究助成費	300,000	0	国際学術交流の推進(講師交通費、謝金等)
2)広報活動費	400,000	100,000	ホームページコンテンツ英文翻訳代
3)予備費	90,800	0	
当期支出合計	790,800	100,000	(単位/円)
当期 差し引き残高(繰越金)		915,800	

平成23年度 特別会計予算書(案)

1.収入の部			
科 目	予算額		摘 要
1)前年度繰越金	915,800		
2)印税収入	-		
当期収入合計	915,800		(単位/円)
2.支出の部			
科 目	予算額		摘 要
1)研究助成費	500,000		国際学術交流の推進(講師交通費、謝金等)
2)広報活動費	400,000		ホームページ・コンテンツの英文化
3)予備費	15,800		
当期支出合計	915,800		(単位/円)

事務局だより

○会報が10号となりました。はじめに東日本大震災、放射能災害から1年半が経とうとしておりますが、あらためまして、いち早い復興を事務局一同祈念申し上げます。さて、この一年、中学校武道完全必修化スタート（4月）や、第15回世界剣道選手権大会が無事終了（5月）と、会員の先生方のご尽力、大変お疲れ様でした。8月に行われたロンドンオリンピックでは、あらためて剣道という伝統の中身と、国内外における普及について、本会では考えるべきことが沢山あると感じました。

本号では昨年の国際武道大学で開催された「剣道の固有性を考えるー海外における剣道学習者が、剣道に求めるもの（長期滞在指導の経験を通して）ー」とまたハンガリーEötvös Loránd Universityの山地征典先生ご講演の「日本学としての武道」を掲載しました。

今年度シンポジウムは、9月7日（金）13：30－16：00 東京農工大学小金井キャンパスで「あらためて剣道具について考える」を開催します（無料）。是非とも多数のご参加を事務局一同お待ちしております。（数馬）



○日本武道学会では、ホームページを活用した情報発信を進めています。その一つとして、現在、武道学研究のバックナンバーの全てを網羅したデータベースのリニューアルを行っています。リニューアルは独立行政法人科学技術振興機構が運営するJ-STAGEを利用して行っており、今年度中には公開できる計画です。これにより、日本語検索だけでなく英語での検索も可能となり、武道学術情報の国際的発信を果たすことができることとなります。一方、剣道専門分科会ホームページ「KENDO ARCHIVES」(<http://www.budo.ac/kendo/>)でも、情報発信を進めさせて頂いています。各行事案内、会報ESPRITのダウンロード、研究報告、研究動向、シンポジウムの英文翻訳などを掲載しています。また、英語ページも作成しており、剣道の学術情報の発信を行っています。剣道の国際的普及が進む中、国内のみならず国外にも情報発信できるホームページの役割は、益々大きくなっています。事務局では更なるホームページの充実を図るべく作業を進めていく所存です。会員の皆様からの情報もお待ちしております。（齋藤）



平成24年8月30日発行



平成24年8月30日発行